

Keio

Research

Center

for

the

Liberal

Arts

慶應義塾大学
教養研究センター

2018 年度
活動報告書

2018年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

は じ め に

慶應義塾大学教養研究センター所長 小菅隼人

2018年度の活動報告書をお届けします。「平成」は、2019年4月30日をもって終わりましたので、平成最後の活動報告書ということになります。

詳しくは各項目に譲りますが、2018年度の特筆すべき新しい活動として、実験授業「日吉学」が終了し、2019年度からは、新たに株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」として開講出来る準備が整ったことが挙げられるでしょう。これは不破有理教授の綿密な計画と教養教育にかける熱意の賜物です。2019年度からの新たな展開にご期待ください。基盤研究の中の「教養研究」は2年目に入り、大きなシンポジウムが2つと充実した研究講演会が行われました。これもまた、教養研究センターの大きな成果でした。

教養研究センターの最大のミッションである、「教養を定義する試み」はまだ道半ばです。しかし、これまでの活動を通じて、教養のいくつかの性格は見えてきたように思います。3つに纏めてみましょう。

- (1) 教養は「繋がる力」であること。教養は、時には読書を通して、時には社交を通して、時には身体知を通して、過去と現在を繋ぎ、世界の人々を繋ぎ、自然や環境と人を繋ぎます。教養を身に付けることは「繋がる力」を身に付けることでもあります。
- (2) 教養はそれ自体「多様性」を持っていること。おそらく、万人に共通の教養というものはないのかもしれませんが。それぞれの時代、それぞれの地域、それぞれの世代において持つべき教養があるだけであり、その多様な姿こそ教養の姿なのかもしれません。
- (3) 教養は「身体性」があるということ。殆ど全ての人が常に端末を持っている今日、膨大な知識の集積は常に人々の傍らにあります。しかし、それを使いこなし、その知識を編集し、ネットワークを作る力こそが教養の力なのではないでしょうか。その為の知識と訓練が教養教育なのだと思います。

私たち教養研究センターは常にこの3つを意識しつつ、さらに教養についての研究を進めていきたいと思っています。

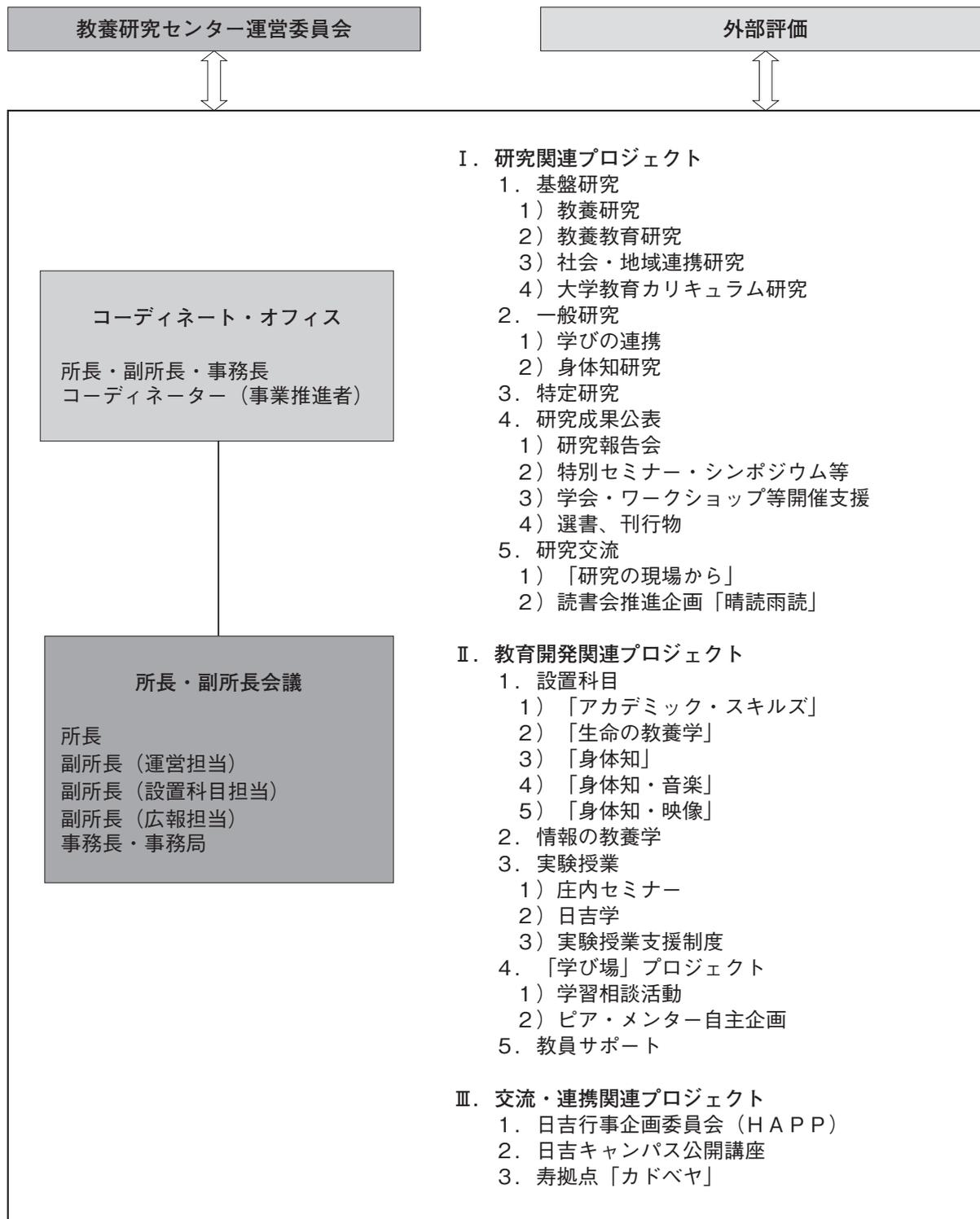
教養研究センターの全ての活動はこの報告書に示されています。そして、忘れてはならないのは、それらは、極東証券株式会社様、株式会社白寿生科学研究所様、株式会社コーエーテクモホールディングス様、鶴岡市、致道博物館など大学外部からの様々なご支援を受けて展開できているという事実です。そのご期待に背くことがないように、我々所員・教職員で精一杯努力する所存ですので、何卒今後ともご指導とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

目 次

はじめに	3
組織構成と事業計画	6
2018年度事業報告	7
広報・発信	10
I 研究関連プロジェクト	
基盤研究・一般研究・特定研究	12
研究成果公表	
学会・ワークショップ等開催支援	16
研究交流	
研究の現場から	17
読書会推進企画「晴読雨読」	18
II 教育開発関連プロジェクト	
1 設置科目	
1-1 アカデミック・スキルズ	20
1-2 生命の教養学—組織と生命について	21
1-3 身体知—創造的コミュニケーションと言語力	22
1-4 身体知・音楽	23
1-5 身体知・映像	25
2 情報の教養学	26
3 実験授業	
3-1 庄内セミナー	28
3-2 過去から未来を紡ぐ「日吉学」	30
4 「学び場」プロジェクト	32
III 交流・連携関連プロジェクト	
1 日吉行事企画委員会（HAPP）	33
2 日吉キャンパス公開講座	35
3 地域連携拠点「カドベヤ」	37
4 「創造力とコミュニティ」研究会	38
5 羽田功教授最終講義「異端の教養学」	39
資料編	
1 慶應義塾大学教養研究センター規程	40
2 運営委員会委員	42
3 組織構成員	43
4 2018年度の主な活動記録	45

※1つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では、便宜上各プロジェクトを3つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター組織構成と事業計画（2018年度）



コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、啓蒙・サポート活動、地域連携活動として概要を述べる。

1 研究活動について

A) 昨年度からはじまった「教養研究」は、2018年度に2回の大きなシンポジウムと1回の研究講演会をおこなった。シンポジウムのうち1回は、芸術関連学会連合との共催で、教養と芸術の関係について、全国規模のシンポジウムが出来たことは大きな成果である。

B) 「文理連接プロジェクト」は具体化を目指して企画立案を進めた結果、2019年度から新たに各学期3回の研究講演会を軸に研究活動を展開する目途がついた。「高大連携プロジェクト(教養の一貫教育)」は、慶應義塾高校との連携によって、共同事業を2019年度より展開する目途がついた。「劇場プロジェクト」については、学生団体と連携しつつ、鋭意検討中である。

C) 2018年度も前年度同様「大学教育カリキュラム研究」については特段の研究活動はない。しかし、今後、基盤研究が進んだ時にあがってくるであろう大学院問題などを議論する受け皿として、今後も教養研究センターの事業として設置する予定である。

2 設置科目について

A) 「アカデミック・スキルズ」：教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、前年度同様、「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」が開講された。また、学生主体の「プレゼンテーション・コンペティション」と「論文コンペティション」も実施され、さらにこの授業の充実化がはかられた。「アカデミック・スキルズ(英語)Ⅰ・Ⅱ」については、2018年度は休講となったが、今後の需要を予測して廃講とはせず、2019年度に再び新たに開講することになった。

B) 「生命の教養学」：荒金直人准教授を中心に、「組織としての生命」を2018年度のテーマとしてオムニバス講義が行われた。75名の受講者によって、生命の営みを組織という観点から、理系と文系の両方の手法によって再検討する講

座となった。講義録として2019年度に出版される予定である。

C) 「身体知」：横山千晶教授を担当講師として、「伝える」をテーマに集中講義として実施された。夏目漱石、エセル・ローハン、ジョー・ミノのテキストを、身体を通して読むことで、「今まで読書が好きだったという参加者も、新しい本の読み方を経験し、同じものを他者と読みながら、意見交換していくことの重要性に目覚めた」という感想を得る授業となった。横山教授の綿密な講義設計によって、通信教育課程生と通学生22名が共に学ぶ貴重な機会ともなった。

D) 「身体知・音楽」：「身体知・音楽Ⅰ・Ⅱ」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を未来社会に派遣するということを目指している。2018年度は、白寿生科学研究所寄附講座として運営された。音楽大学以外で、実践も含めたこれ程充実した音楽教育を行っている大学は他に無いのではないかと自負している。音楽を通して教養教育のさらなる展開が期待される。

E) 「身体知・映像」：相変わらず、学生たちの映像リテラシーに寄せる関心の高さをうかがわせた。横山千晶、佐藤元状担当講師のもとで集団制作の技術をも学ぶことができた。今年度は、2ページの短編を通して4本の短編映画が製作され、上映会もおこなった。

3 啓蒙・サポート活動について

A) 「日吉キャンパス公開講座」：慶應義塾の知を広く社会に公開する、日吉における代表的活動としてこの講座がある。主として一般の方々を対象とした有料の公開講座である。2018年度は、寺沢和洋助教を中心に「ルールと作法」をテーマとして、9月から11月まで5週、計10名の講演を行った。日程の入れ替えなどはあったが、概して順調に進み、前年以上の多くの申込を受け、このテーマに対する関心の高さを伺わせた。

B) 「情報の教養学」：高田眞吾教授をコーディネーターとして、主として学生を対象に、教職員・一般の方々にも開いた公開講座である。2018年度は、「情報の光と影」をテーマとして、講演会を6回実施した。理工学部との共催

事業としての Google のソフトウェアの紹介は、新しい開催形態として今後の参考になった。ほとんどの講演は YouTube 上で公開されている。

C) 「学習相談」: 本年度も、日吉メディアセンターとの共催で行われた。学生を対象として、日吉メディアセンターと共同で行われているこの事業は、学生が自ら教えることで学ぶ「半学半教」の精神に基づき、教職員のサポートによって学生主体で行われている。慶應独自の学びの形を実践する事業として、また、「教養の方法」を模索する企画として、意義あるものと考えている。

D) 「研究の現場から」 「学会・ワークショップ等開催支援」: 教養研究センターは、教職員を対象として、日吉キャンパスでの研究教育活動を活性化する様々な支援活動を行っている。これは、当センターが支援することで所謂「ハブ」となって教職員を繋ぎ、教養の基礎概念である「多様性」のあり方を実現・模索するための試みである。詳しくは本文に譲るが、今後も継続させたい事業であると考えている。

E) 「読書会」: 2018 年度は、工藤多香子准教授を中心に、2016 年度からの読書会推進企画「晴読雨読」の第 3 弾が実施され、ハンナ・アレントの『人間の条件』が開始された。また、教養研究センターからの提案によって、片山杜秀教授によって『懺悔道としての哲学』が前年度より継続、『論語』、『日本政治思想史研究』が開始された。これはいずれも、日吉キャンパスにおける読書会開催を促進することで教員の研究交流の機会を増やすとともに、学生を含めた日吉キャンパス全体の読書習慣の活性化をはかる支援プログラムである。さらなる活性化が期待される事業である。

4 地域連携活動について

A) 「庄内セミナー」: 教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパスを拠点として 2008 年以來、庄内セミナーを開催してきた。2014 年度に未来先導基金としての活動が終了し、2015 年度からは、新たに経常予算を計上して実施された。この事業では、地域と大学が一体になって学生を教育し、新たな教育方法として一つのモデルとなることが期

待されるが、その意味では、単なる地域連携・交流活動ではなく、また単なる教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。2018 年度、再びこのセミナーの生みの親である羽田功教授を実行委員長として開催され、天候には恵まなかったが、スタッフが適切に対応して、全員揃って全行程を終えた。終了後、活動報告書が作成され、関係各所に配布された。

B) 「日吉学」: 2013 年に開始した「日吉学」は、講義とフィールドワーク、グループ・ディスカッションによって知識を体験と結び付け、日吉の自然、地理、歴史を総合的に学ぼうという試みである。「日吉学」は実験授業に位置付けられ、授業形式・参加学生の年齢構成・教授陣の多様性に特徴がある。その後も活動は続けられたが、新たな整理と展開のため、不破有理教授を中心に、2016 年度春学期に検討委員会を持ち、2016 年度秋より設置授業化を目指して再開された。2017 年度は設置講座の準備年として継続し、幸いにも寄附の申し出をいただき、2019 年度より設置科目化の目途がたった。2018 年はその具体的な手続きが進められた。

C) 日吉行事企画委員会 (HAPP): 2017 年度、前年の形式を引き継ぎ、新たな内容で展開された。1990 年代にはじまった入学歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。

D) 「カドベヤ」: 2011 年 4 月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立されたオルタナティブスペース「カドベヤ」も継続中の重要な地域連携活動である。前年同様、「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』」が行われた。「日吉学」同様、新たなコミュニティの創出という意味で、単なる地域連携・交流活動ではなく、また教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

E) 「創造力とコミュニティ」研究会: 2018 年度新たにこの研究会が立ち上げられた。その理念は、発案者である横山千晶教授の宣言に以下の

ように記述されている：

…おそらく21世紀はこの「創造性」と「コミュニティの活性化」は、強力な連携が期待されている二つのキーワードです。しかしながら、「創造性」とは何でしょうか。また「コミュニティ」とはいったいどのようなものなのでしょうか。／イギリスの批評家、レイモンド・ウィリアムズ（1921～1988）は、20世紀に入ってから creative という用語の濫用を指摘しました。community という言葉も、さまざまな人間の直接的な関係や組織体が、歴史の中で複雑に絡まって形成されていった言葉です。ITによるヴァーチャルなコミュニティをも内包するようになった現在、そのイメージは、さらに大きく変化しつつあります。／おそらくこれからの教養は、ある意味で濫用され、さまざまにイメージ化されてきた概念をもう一度見直すことで、より実感できる「創造的」な「コミュニティ」の在り方を模索することでは

ないでしょうか。…

確かに、濫用される「創造力」「コミュニティ」を我々は今一度問い直す必要があります、この研究会の今後の展開が大いに期待される。

F) 今年度の新たな事業として、羽田功教授最終講義「異端の教養学」を開催した。教養研究センターとして「最終講義」を主催した理由として、(1) 教養研究・教養教育のために尽力された所員の講義を聴く最後の機会を設けたいという希望が多くあったこと、(2) 理工学部など最終講義を開催している学部はあるが、多くは卒業生による個別のイベントになっており、実態として日吉所属教員については殆ど行われていないこと、が挙げられる。当日、2019年2月1日、日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにおいて、出席者名簿に署名しただけでも86名の参加者を得て、開催された。

(小菅 隼人)

教養研究センターでは、様々な活動の広報に努め、センターの意義を常に発信している。講演会や公開講座などはポスター、チラシによって告知するとともに、ウェブページを活用して最新情報を随時発信し、研究・教育活動の周知を行っている。

また、慶應義塾大学出版会と連携し、活動成果を公開する書籍などの出版にも力を入れている。2018年度の刊行物は以下の通りである。

1. 極東証券寄附講座

【生命の教養学】

■赤江雄一編『生命の教養学 13 飼う』 2018年7月30日刊行

オムニバス講義「生命の教養学」は、講座の内容を書籍にまとめて出版している。本年度は2016年度の講座について、11本の論考を掲載した。総頁数249ページ。

【アカデミック・スキルズ】

■『2018年度「アカデミック・スキルズ」学生論文集』 2019年3月31日刊行

センターの看板科目である少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、一年かけて学生が論文を完成させる。これを学生自身が編集し、論文集として2004年度より毎年刊行している。本年度は諸学部1、2年生の論文18本と、身知体・映像クラスのシナリオ4本を、講評とともに掲載した。

2. 教養研究センター選書

■アルベルト・ミヤン マルティン『教養研究センター選書 19 「修身論」の「天」——阿部泰蔵の翻訳に隠された真相』 2019年3月31日刊行

センターでは、研究の前線を一般にもわかりやすい形で紹介することを趣旨として、選書を刊行している。原稿は毎年所員から募集し、査読選考を経て刊行を決定している。2018年度は1作が刊行された。

3. 報告書

■『教養研究センター 2017年度活動報告書』

2018年8月31日刊行

■『2018年度 第9回「庄内セミナー」報告書』

2018年11月30日刊行

4. Newsletter (ニューズレター)

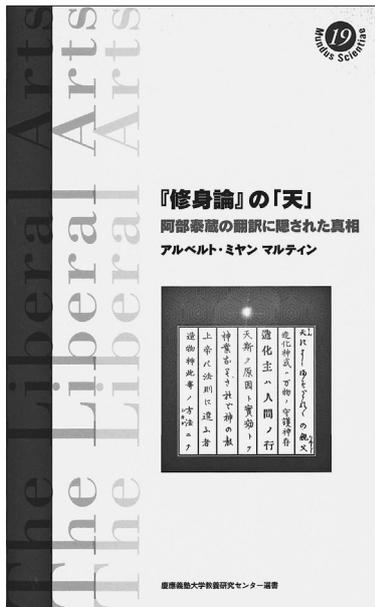
■32号 2018年5月16日刊行

■33号 2018年11月30日刊行

日吉所属教職員とセンター所員を対象とした広報の一環として、Newsletterを年2回刊行し、半年間の活動についてレポートを行い、今後の予定について告知する。巻頭言などのコラムもある。

(高橋宣也)

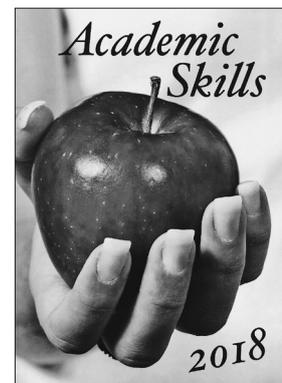
2018 年度教養研究センター
刊行物一覧



教養研究センター選書
(2019.3.31 刊行)



極東証券寄附講座
生命の教養学 13「飼う」
(2018.7.30 刊行)



2018 年度
アカデミック・スキルズ学生論文集
(2019.3.31 刊行)



2017 年度活動報告書
(2018.8.31 刊行)



Newsletter32 号
(2018.5.16 刊行)



Newsletter33 号
(2018.11.30 刊行)



2018 年度
「庄内セミナー」報告書
(2018.11.30 刊行)

基盤研究・一般研究・ 特定研究

基盤研究

2018年度は、基盤研究のうち、「教養研究」を継続する一方、新たな基盤研究の整理・検討を行う年となった。すなわち、「教養研究」に加え、「教養教育研究」として①劇場プロジェクト、②ゲームの教養学、また「教養接続研究」として①高大連携プロジェクト（教養の一貫教育）、②文理接続プロジェクトについての可能性を議論し、将来的なビジョンの議論を始めた。具体的な進行は2019年度からになるので、詳細は来年度の報告に譲りたい。

「教養研究」については、前年に続いて、小菅と片山副所長が担当し、研究講演会が1本、シンポジウムが2本行われた（後述）。

「大学教育カリキュラム研究」については、今後、日吉に置ける大学院設置を目指して、議論が高まり、2019年度から、大学院設置を「大学教育カリキュラム研究」の中に位置づけることになった。

「社会・地域連携研究」については、2018年度をもって9年間の「カドベヤ」の廃止を受けて、新たな研究会がスタートした。この研究会は2019年度以降一般研究のカテゴリーであるが、2019年度からの「日吉学」設置科目化が決定している状況の中で、新たな研究の枠組みでの社会・地域連携を考える必要がある。

一般研究

例年通り、申請のあった研究活動に対して、研究オフィス運営協議会の承認を経て、来往舎2階のプロジェクト研究室（204室、205室）とプロジェクト研究員室（202室）を、研究オフィスとして提供した。これまで、一般研究については、所員の申請をほぼ自動的に認められていたが、2018年度より、まず、研究プロジェクトをコーディネート・オフィスの承認のもとにしっかりと位置付けるべきという考え方に立って、全ての一般研究についてコーディネート・オフィスで審議され、その承認をもって、研究オフィスの提供をおこなった。

特定研究

2018年度、この項目について特段の活動は行われなかった。

2018年度・プロジェクト研究員室（202室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ	利用者氏名・所属
木島伸彦・商学部准教授	英語学習とパーソナリティ尺度及びその言語脳神経科学的考察	水澤祐美子 (理工学部講師 (非常勤))
鈴木晃仁・経済学部教授	日本における精神病床入院メカニズムの実証研究	後藤基行 (社会学研究科訪問研究員)
鈴木晃仁・経済学部教授	精神医療の資料整理及び目録作成	清水ふさ子 (社会学研究科研究員 (非常勤))
鈴木晃仁・経済学部教授	日本におけるトラウマとモダニティ：戦争と労働災害をめぐる経験・解釈・補償制度	中村江里 (社会学研究科訪問研究員)

2018年度・プロジェクト研究室（204室・205室）利用申請一覧

研究代表者	研究テーマ
小原京子・理工学部教授	意味フレームに基づく言語資源の改良と他の言語資源とのリンク
津田真弓・経済学部教授	日本学教育の国際化に関する研究
森吉直子・商学部教授	Corporate Visual Identity に対する消費者反応に関する国際比較研究
阿久沢武史・慶應義塾高等学校教諭	地域と連携した日吉地区の戦争遺跡の研究と教育的活用

基盤研究「教養研究」

教養研究シンポジウム no.2 / 2018 年度第 1 回

2018 年 6 月 2 日 13:00~17:00、慶應義塾大学日吉キャンパスを会場として「藝術と教養〈藝術は教養たりえるのか?〉」が行われた。慶應義塾大学教養研究センターと藝術学関連学会連合による共催行事であり、教養研究センターとしては、基盤研究「教養研究」における春学期開催イベントの位置づけである。共催の「藝術学関連学会連合」というのは、芸術に関連する 15 の学会の連合体であり、教養研究センターとの共催は初めてであるが、藝術学関連学会連合シンポジウムはテーマを変えつつ 2006 年より毎年行われている。今回は、日本演劇学会が幹事学会であり、小菅が日本演劇学会副会長であったため、教養に関するテーマの設定、会場と運営を提供し、教養研究センターとの共同開催が実現した。当日は、永田靖日本演劇学会会長（大阪大学副学長）が挨拶、小菅が趣旨説明を行った後、第 1 部では、塚田章（意匠学会・京都市立芸術大学教授）「インダストリアル・デザインと教養」、山下純照（日本演劇学会・成城大学教授）「教養の変貌—現代演劇における」、山口遙子（美学会・東京藝術大学専門研究員）「芸術を教養として学ぶこと—1760~1770 年代の『愛好家向け』アルファベット式芸術事典に即して」、佐藤康宏（美術史学会・東京大学教授）「知識人の絵画—南画とその享受者」の各氏が発表を行い、休憩を挟んで続く第 2 部では、富田直秀（日本デザイン学会・京都大学教授）、青木孝夫（広島芸術学会・広島大学教授）がディスカッサントとなって活発な討論が行われた。当日は約 80 名が来場した。発表と討論の内容については、慶應義塾大学教養研究センターが報告書としてまとめ公刊している。日本演劇学会が、2017 年の学会テーマとして「演劇と教養」を取り上げ、それをさらに広げて「藝術と教養」について芸術関連諸学会と議論ができたことで、この問題をより深く考える上でとても有意義な研究集会になった。シンポジウム終了後、大学キャンパス内の HUB で他学会の会員と懇親のひと時を持てたことも、今後の教養研究、芸術関連の研究者同士の交流に大いに資するところがあった。（小菅隼人）



教養研究シンポジウム no.3 / 2018年度第2回

「教養研究」のシンポジウムの第3回として、2018年10月6日の13時から16時半まで日吉キャンパス来往舎のシンポジウムスペースに於いて「クラシック音楽を“教養”から考える」を開催した。全体は2つの講演と鼎談で構成された。

第1の講演は、作家の平野啓一郎氏による「小説の中の音楽」。平野氏はまず、幼少期のピアノのレッスンの記憶などを交えながら、家庭や学校的环境から作家生活におけるクラシック音楽とのかかわりを、実にリアルに語った。その核心をなすのは、平野氏のショパンへの傾倒と、アルゲリッチ母子との交際の物語である。平野氏の人間成長物語としての教養にも、平野氏の文学を支えるリベラル・アーツとしての教養にも、クラシック音楽がどれほど大きな役割を果たしているかが、浮き彫りにされた。そこから小説に現れる音楽の問題へとよいよ踏み込んでゆくが、取り上げられたのは、平野氏自身の創作よりも、トーマス・マンの『道化者』、森鷗外の『文づかひ』、そして三島由紀夫の『仮面の告白』だった。それらでの女性の弾くピアノの描かれ方・写され方が、近代社会における女性の内面といかに結びつくものかが示唆され、文学史と音楽史と、近代的自我の成熟と未成熟といった問題系を重ね合わせる方法が示唆されて、知的興奮がもたらされた。

第2の講演は、名古屋外国語大学学長の亀山郁夫氏による「私のショスタコーヴィチ」。亀山氏もまた自らの人生の軌跡をクラシック音楽とダブらせて巧みに語り、楽器の学習、学生オーケストラでの体験等が織り込まれて、亀山氏の人間形成がクラシック音楽と切っても切れないもので、クラシック音楽をまさに教養として内面化していることが告白的に示された。そのあと、本題のショスタコーヴィチに入って行くのだが、亀山氏にとってプロコフィエフとショスタコーヴィチが、平野氏にとってのショパンに相当すると言え、平野氏のショパンが個人の内面、私的なものと結びついているとすると、亀山氏のアイドルであるロシア・ソヴィエトの作曲家たちは公的なもの、集団、マッス、壁画的なものの表象として、亀山氏には特に観念されている。そこに平野氏との鮮やかなコントラストが形成された。

以上、二つの講演を踏まえ、最後に平野氏と亀山氏、および本催事のコーディネーターの教養研究センター副所長、片山杜秀が短い鼎談を行い、片山は

両講演の共通性と対照性の整理を試みた。

(片山杜秀)

昭和初期から高度成長期にかけて、日本ではクラシック音楽が“教養ある中間層”の、必須ではないけれどもかなり重要なアイテムとして求められました。1960、70年代には多くの大手出版社がレコード会社と組んで、“家庭名曲全集”のようなセット物のレコード+書籍を販売しましたが、それは百科事典とまさにパラレルでした。それから、“教養小説”というときの“教養”は、“教養豊か”や“教養ある”などと呼ばれるときの“教養”と違って、人間の魂が教養養われ成長するという意味ですが、そのイメージは、ひとり自宅で交響曲やピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲を聴いて沈黙する姿と、とてもよく合致します。クラシック音楽はかくも“教養”と幅広く結びついてきたのです。そこを考えたい。しかも社会的に客観的に考察するのではなく、クラシック音楽、いや、そのみならず広く音楽をご自身のお仕事の内容に強く引き付けてこられた、ロシア文学者と小説家のお二方に語っていただくことで、考えたい、というのが今回の企画です。

教養研究センター 基礎研究「教養研究」シンポジウム no.3

クラシック音楽を “教養” から考える

10/6 Sat
参加費無料
申込不要

日時：2018年10月6日(土) 13:00-16:30 (12:30開場)
場所：日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース
対象：研究者、教職職員、関心のある学部生・大学院生

亀山 郁夫
平野 啓一郎

13:00-13:10 開会挨拶
小菅 隼人 (教養研究センター所長)
13:10-14:10 講演1「小説の中の音楽」
平野 啓一郎 (小説家)
<休憩 10分>
14:20-15:20 講演2「私のショスタコーヴィチ」
亀山 郁夫 (名古屋外国語大学 学長)
<休憩 10分>
15:30-16:20 鼎談「クラシック音楽を“教養”から考える」
平野 啓一郎 / 亀山 郁夫 / 片山 杜秀 コーディネーター・司会
(教養研究センター副所長)
16:20-16:30 閉会挨拶 片山 杜秀

主催： 履正社大学教養研究センター toiawase-lib@adst.keio.ac.jp <http://lib.artsh.keio.ac.jp/>



教養研究講演会 no.3 / 2018年度第1回

2019年1月16日 18:15~19:45、慶應義塾大学日吉キャンパスを会場として基盤研究・研究講演会「大地の芸術学—庭園と建築を歩む」が行われた。講師は、慶應義塾大学名誉教授 前田富士男（近代美術史学・芸術学）である。この研究講演会は、「教養とは何か?」「教養はどのような役割を果たしてきたのか?」「教養は何のために必要か?」という問いに対する答えを模索するための基盤研究催事の2018年度第3回目である。前2回は教養と演劇、教養と音楽を題材としてきたが、今回は教養と美術という視点から、美学芸術学の問題として、現代社会における自然環境と教養の関係について本塾大学前田富士男名誉教授に講演を依頼した。

前田教授が提示した講演趣旨は次のようなものであった。「人間はつねに、自然環境に身を寄せて生きてきた。現代の情報社会も、自然環境の重要性を繰り返し強調してやまない。けれども、小さな携帯情報デバイスをポケットに忘れない日々、自然は、ひととき眼と心をやすめる場に変貌したようだ。大地にふれ、空と樹木の息づかい、芝や苔のみどり、水の音に想いをひそめる——これはしかし、それほど易しくない。17世紀に微分学を開拓した数学者・哲学者ライプニッツの作った庭園に、18世紀のイギリス式風景庭園に疑問符を付したゲーテの手になるイルム川公園に、いや、19世紀末に枯山水を真っ向から否定した七代植治による京都・無鄰菴に身をおこう。自然や大地の時間は、むしろこうした造形作品からこそ、立ち上がってくるにちがいない。教養の本義は、ドイツ語の〈自己形成 Bildung〉にほかならない。自己形成に、アルゴリズム（合理的問題解決法）の加速感も無用ではない。だが、とりあえず大地の呼吸に自分自身の呼吸をゆっくりと同調させてみよう。自己への問いかけが生まれるはずだ。」

平日夕刻の開催時間ではあったが、当日は、一般の方々も含めて多くの来場者に恵まれ、非常に有益な講義、質疑応答ができた。なお、この講演会の内容については、教養研究センターのホームページにおいて公開されている。

(小菅隼人)

人間はつねに、自然環境に身を寄せて生きてきました。
現代の情報社会も、自然環境の重要性を繰り返し強調してやみません。たしかに、小さな携帯情報デバイスをポケットに忘れない日々、自然は、ひととき眼と心をやすめる場に変貌したかのようです。大地にふれ、空と樹木の息づかい、芝や苔のみどり、水の音に想いをひそめる——これはしかし、それほど易しくありません。
17世紀に微分学を開拓した数学者・哲学者ライプニッツの作った庭園に、18世紀のイギリス式風景庭園に疑問符を付したゲーテの手になるイルム川公園に、いや、19世紀末に枯山水を真っ向から否定した七代植治による京都・無鄰菴に身をおいてみましょう。自然や大地の時間は、むしろこうした造形作品からこそ、立ち上がってくるはずです。
教養の本義は、ドイツ語の「自己形成 Bildung」にほかなりません。自己形成に、たしかにアルゴリズム（合理的問題解決法）の加速感も無用ではありません。だが、とりあえず大地の呼吸に自分自身の呼吸をゆっくりと同調させてみませんか。自分自身への問いかけが生まれるはずですから。

教養研究センター基盤研究講演会
大地の芸術学—庭園と建築を歩む
no.3

日時：2019年1月16日（水）
18:15~19:45
場所：日吉キャンパス来客舎1階
シンボジウムスペース
対象：研究者、塾教職員
関心のある学部生・大学院生
参加費無料・申込不要



前田 富士男
Fujio Maeda

慶應義塾大学
名誉教授
近代美術史学
芸術学

主著書
『ハウル・クレー 絵画のたぐらみ』（新潮社）
『ハウル・クレー 造形の宇宙』（慶應義塾
大学出版会）
『色彩からみる近代美術 ゲーテより現代へ』
（編著、三元社）

1/16
Wed

主催：慶應義塾大学 教養研究センター
toiwase-lib@adst.keio.ac.jp http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/



I 研究関連プロジェクト

研究成果公表
学会・ワークショップ等
開催支援

教養研究センターでは、所員が研究会・ワークショップ等を企画する場合、支援、奨励を行うことで所員の研究・教育の活性化を図っている。

所員による創造的な企画や意欲的な挑戦を奨励し

促進することを趣旨としており、2018年度は以下の12件が採択となった。

(小菅隼人)

2018年度 学会・ワークショップ等開催支援一覧

申請者	会合名	開催日	場所	参加人数
Roger Batty (経済学部)	Dr. John Curran 講演会	2018年4月2日、4日	来往舎2階 中会議室	塾内 7名 塾外 11名
磯崎 敦仁 (法学部)	公開シンポジウム「北朝鮮とどう向き合うか」	2018年6月27日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 47名 塾外 52名
佐藤 元状 (法学部)	アール・ジャクソン教授講演会 "Passionate Agendas: Melodrama in Yoshimura Kozaburo" 「情熱的なアジェンダ 吉村公三郎におけるメロドラマ」	2018年6月30日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 5名 塾外 10名
小林 拓也 (理工学部)	目指せ！オリンピック・パラリンピックボランティアスタッフ	2018年7月4日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 60名 塾外 20名
徳永 聡子 (文学部)	Storytelling for a Global Audience グローバル・オーディエンスに響くストーリーテリング	2018年7月17日	来往舎2階 大会議室	塾内 28名 塾外 3名
大出 敦 (法学部)	マラルメ・シンポジウム	2018年9月7日～9日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 10名 塾外 100名
松岡 和美 (経済学部)	フランス映画『ヴァンサンへの手紙』を通して考える手話と異文化共生、そしてろう教育	2018年10月7日	第6校舎 J634 教室	塾内 15名 塾外 185名
渡名喜庸哲 (商学部)	2018年度 京都ユダヤ思想学会関東大会	2018年10月27日	来往舎2階 大会議室	塾内 5名 塾外 35名
大和田俊之 (法学部)	JASPM30 第30回 日本ポピュラー音楽学会年次大会	2018年11月24日、25日	第6校舎	塾内 35名 塾外 132名
福田 桃子 (経済学部)	鳥たちのフランス文学	2018年11月25日	来往舎 シンポジウムスペース	塾内 20名 塾外 40名
不破 有理 (経済学部)	国際アーサー王学会日本支部 第32回年次大会	2018年12月8日	来往舎2階 中会議室	塾内 15名 塾外 25名
加藤 伸吾 (経済学部)	「いきる力」を引き出す！スペインのプログラム	2019年1月25日～27日	25日、27日：来往舎中会議室 26日：来往舎大会議室	塾内 11名 塾外 151名



研究交流 研究の現場から

教員が自身の研究内容を自由に語る企画で、軽食を交えての議論も活発に行われる。

2018年度は例年通りに春学期に1回、秋学期に2回開催された。

■第1回 2018年5月30日（通算第22回）

講師：杉山有紀子（理工学部）

「ヨーロッパ・ユダヤ・オーストリアのはざま
で——S・ツヴァイクと20世紀オーストリア文学」

杉山先生は、ウィーン出身の作家シュテファン・ツヴァイクについて、回想録『昨日の世界』と小説『チェスの話』を中心にお話しになった。ツヴァイクは自分の時代への洞察を深めて作品とし、彼にとっての「昨日」とは第二次世界大戦勃発時を境にするものであった。しかしオーストリアでは、彼の文章は第一次大戦以前の繁栄期を「昨日」として懐古的に見るように受容されていた。その乖離が表す問題や、音楽などのジャンルへの広がりなど、示唆に富むお話であった。

■第2回 2018年10月10日（通算第23回）

講師：加藤有佳織（文学部）

「カッパが海を渡るとき——現代北米小説における妖怪について」

加藤先生は、アメリカ文学を専門とされる一方でカッパにも興味を持ち、本会ではカナダの日系作家 Hiromi Goto の小説 The Kappa Child (2001) について話された。カッパが日本固有の妖怪であるならば、作品中のカッパは日本文化の象徴と考えられる。しかし中国が起源という説も考慮すると、移民問題などもはらんだものとなり、多義的な視点を取ることができそうである。質疑では怪獣映画でのカッパの表象などにまで話が広がった。

■第3回 2018年12月12日（通算第24回）

講師：糸田文（理工学部）

「“November 1918” とアルフレート・デーブ
リン」

糸田先生は、『ベルリン・アレクサンダー広場』

で知られる20世紀の作家デーブリンを取り上げられた。著名でありながら一連の大作家の列に連なるかは微妙な評価にある彼の特徴を検討し、100年前の11月革命を扱った表題の作品を抜粋で読みながらたどった。独特の語り口について子細に教示を頂き、作家の個性と立ち位置について考えさせられた。第1回のツヴァイクの話とも接続するところがあって興味深いものであった。

（高橋宣也）



研究の現場から
サロン日吉 円卓の会へ
ご招待!

「研究の現場から」は研究者交流サロンとして、教員の研究分野を紹介し、和やかな雰囲気でお話する企画です。
軽食をとりながら、学部や分野を越えて交流を深めていただけます。

第二十二弾 5月30日（水）18:15～ 来往舎1階101
杉山 有紀子（理工学部 助教）

「ヨーロッパ・ユダヤ・オーストリアのはざま
で——S・ツヴァイクと20世紀オーストリア文学」

日吉キャンパスでは、大勢の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。お互いの研究を知り、情報を交換し合うことで、さらに素敵なアイデアが生まれることもあります。何より、まず知り合いになることが、より豊かな研究教育への第一歩だと教養研究センターは考えます。
ぜひお気軽にお立ち寄り下さい！



主催：教養研究センター toiwase-lib@adst.keio.ac.jp



研究交流 読書会推進企画 「晴読雨読」

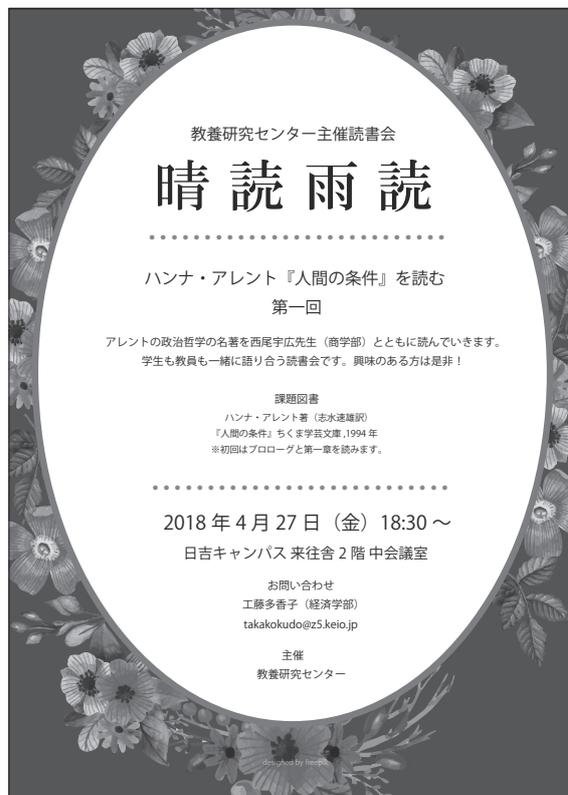
ハンナ・アレント『人間の条件』を読む

この読書会は、読書会推進企画「晴読雨読」のひとつとして2018年4月にスタートした。2018年度は4月27日に初回を開催して以降、5月18日、6月29日、8月3日、10月12日、12月7日、1月11日と計7回実施した。ハンナ・アレントの『人間の条件』という学生にもよく知られた本を取り上げたこともあり、初回から毎回ほぼ20名が集まった。そのうち学生は10名ほどいたが、所属学部は文・法・商・理工学部とさまざまであり、三田キャンパスから参加してくれた学生もいた。

毎回、30~40ページ程度の範囲を定め、内容に関して自由にディスカッションするスタイルをとった。また、アレントの思想に造詣深い、商学部の西尾宇広先生と渡名喜庸哲先生が議論の先導役として、適切にコメントしてくれたり、アレントの経歴や文章スタイルなどに関しても解説してくれたおかげで、非常に内容の濃い読書会となった。よく知られた著作であるにもかかわらず、内容をしっかりとらえて最後まで読み通すのは難しい本書であるが、議論しながら読み進めることで、異なる解釈や新たな視点の発見もあった。今回の読書会では、特に学生が積極的に議論に参加し、貢献してくれたことが印象深い。

当初は1年で読み終える予定であったが、毎回議論が白熱して進む速度がゆっくりだったため、今年度は全6章のうち第4章まで、全体のほぼ半分を読み終えた。2019年度も引き続き同じ読書会で同書を読んでいく予定である。

(工藤多香子)

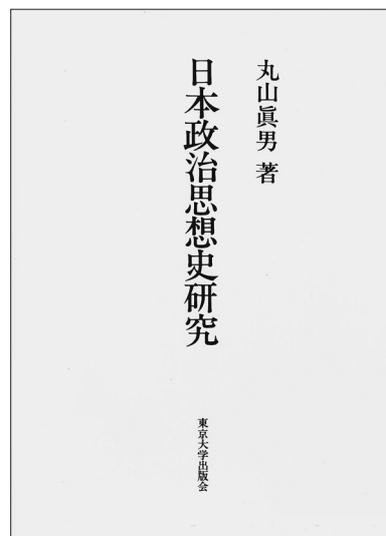


『懺悔道としての哲学』『論語』『日本政治思想史研究』を読む

教養研究センター主催読書会「晴読雨読」では、所長の小菅隼人を案内人、副所長の片山杜秀を解説役として、決してシリーズとして企画されているわけではないが、日本思想史に関連する文献を2017年度から連続して講読している。2018年度はまず、4月18日と6月6日と7月24日に、田辺元の『懺悔道としての哲学』をテキストとして催した。この3回は、2017年度中に10月から3月まで5回開かれた同書の読書会の続きである。毎回一章平均のペースで進め、7月で読了するに至った。『懺悔道としての哲学』は、仏教の浄土教思想、親鸞と浄土真宗の考え方、パスカルからハイデッガーまでの近代西洋哲学を組み合わせ、西田幾多郎の哲学を常なる批判の対象としながら、敗戦国日本の経験に裏打ちされた、20世紀後半に相応しい、危機の時代の世界のための哲学を打ち立てようとした野心作であり、現代の混沌たる世界情勢に思いを寄せるためにも、味読しておくに相応しいものであったと考える。ついで、10月24日と11月13日には、仏教から儒教に転じ、「『論語』は日本でどう読まれてきたか—荻生徂徠を中心としつつ、伊藤仁斎から安富歩までの『論語』理解を知る」と題して催した。岩波文庫版『論語』（金谷治訳注）を共通文献とし、『論語』の有名な箇所を取り上げて、朱子、伊藤仁斎、

荻生徂徠、宮崎市定、安富歩などの注釈書における解き方の違いを比較して進めたが、ポイントになったのは、副題にあるように荻生徂徠である。それには、教養研究センターならではの理由があった。教養研究センターでは、毎夏、庄内セミナーを催し、そのプログラムには、庄内藩の旧藩校、致道館での『論語』の素読が毎回の恒例として含まれている。庄内藩の儒学は荻生徂徠を祖とする徂徠学の系統に属し、『論語』の読み下し方も、徂徠学の独特な仕方が受け継がれ、それはポピュラーな読み下し方とは少し違う。その違いは何を意味し、その読み下し方から徂徠独自の思想がどこまで抽出できるのかを探り、庄内セミナーの関係者とその知識を共有することを、ひとつの目的とした読書会であった。が、それだけではなく徂徠の『論語』解釈に注目する読書会は、徂徠を高く評価した丸山眞男の文献の読書会への導入でもあった。丸山は、戦時期には、西田、田辺らの「京都学派」に対する、近代主義的な見地からの批判者であって、その意味では、『論語』と徂徠の読書会は『懺悔道としての哲学』の読書会を受ける性質のものでもあった。丸山眞男が戦時期にプリリアントな徂徠理解を示した『日本政治思想史研究』は、12月26日に始まり、1月31日、3月14日の3回開かれ、2019年度に継続されている。

(片山杜秀)



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-1 アカデミック・スキルズ

教養研究センターのアカデミック・スキルズは、近年、多くの他大学で必修や選択必修のかたちで課されるようになった、論文の書き方や発表の仕方を訓練する講座であり、その種の授業のパイオニアとしての歴史と実績を持つと自負している。

2018年度は、日本語クラスについては例年通り3クラスを開講した。担当教員は、水曜クラスが、片山杜秀（法、採点責任者）、川添美央子（商）、福田桃子（経）、木曜クラスが、小林拓也（理、採点責任者）、西尾宇広（商）、五味田泰（文）、金曜クラスが、原大地（商、採点責任者）、御園敬介（商）、川村文重（商）であった。

授業内容は例年の原則通りで、春学期に4000字、秋学期に8000字の論文作成を課し、秋学期にはさらに論文内容のプレゼンテーションを行うというものである。具体的な進行については担当教員に委ねており、統一的に細目を定めたシラバスはない。たとえば水曜クラスの場合だと、春学期には履修者を4グループに分けて、グループによる合同論文を各人1章4000字ずつ執筆させ、秋学期には各人が自由テーマで8000字の論文を執筆するというものであった。履修者数は、「履修申込者・履修許可者・最終論文提出者」の順で記載すると、日本語水曜クラスが「40.24.15」、木曜クラスが「13.13.4」、金曜クラスが「15.15.6」であった。

例年開講してきた英語クラスについては、2018年度には履修希望者がひとりしかなく、開講に至らなかった。

年度末には、例年通り、論文とプレゼンテーションの両部門に分かれてのコンペティションが行われた。論文コンペティションには計8本の論文が参加し、金賞2、銀賞2、審査委員特別奨励賞1が選出された。プレゼンテーション・コンペティションには計8人が参加し、来場者の無記名投票によって、金賞1、銀賞1、銅賞1が選出された。

全体の傾向として、2017年度に続き、履修者が減少していると言える。英語クラスが開講に至らなかったのは、深刻な問題である。その原因については、GPA制度の導入や、学部開講で内容も近い少人数授業の増加によって、教養研究センターの開講する少人数で内容的負担も大きく評価の厳しい授業に学生が集まりにくくなっている事情があるのではないかと推測され、それに見合った事実関係も若干把握されている。だが、原因が明確であるとまで

は言い難く、2019年度の状況を踏まえつつ、対応していきたいと考える。（片山杜秀）

2018年度極東証券寄附講座

Academic skills

アカデミック・スキルズ

Presentation

プレゼンテーション

Competition

コンペティション

2月6日（水）14:00~18:00

日吉キャンパス来往舎1階シンポジウムスペース
発表者：2018年度「アカデミック・スキルズ」クラスI・II代表者

学生が一年間培ってきた「知の探求力」を遺憾なく発揮します

主催：慶應義塾大学教養研究センター



II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-2 生命の教養学

—組織と生命について

2018年度の「生命の教養学」のテーマは「組織としての生命」だった。生命とは何か、組織とは何か、生命という概念と組織という概念はどのように関係するのか、という問題意識を導きの糸に、11の連続講演が行われた。以下に各講演の講演者、その所属と職位、専門分野、講演題目を列挙するが、多様な分野を横断しながらも、概ね、理系的ものから文系的なものへ徐々に移行する形を採っており、「生命」と「組織」についての理解が、分野を超えて拡大していくように配置されている（敬称略）。

①堀田耕司、本学理工学部准教授、発生生物学、「細胞から個体へつなぐ組織としてのルール」。

②坂内健一、本学理工学部教授、数学、「生存戦略としての多様性」。

③鳥海崇、本学体育研究所専任講師、コーチング学、「スポーツ組織としての生命」。

④山尾佐智子、本学大学院経営管理研究科准教授、国際経営論、「企業組織の寿命」。

⑤舟橋啓、本学理工学部准教授、システム生物論、「生命現象をネットワーク(組織)として理解する」

⑥林良信、本学法学部助教、昆虫社会学、「昆虫の社会：協力と裏切りがうずまく組織」。

⑦河野礼子、本学文学部准教授、人類進化学、「人類進化と群れ・集団・組織」。

⑧大宮勘一郎、東京大学大学院人文社会系研究科教授、近代ドイツ文学、「慣習としての生命／出来事としての生命」。

⑨黒沢文貴、東京女子大学現代教養学部教授、日本近代史、「生命体としての軍隊」。

⑩田上雅徳、本学法学部教授、西洋政治思想史、「宗教の組織と政治の組織」。

⑪斎藤慶典、本学文学部教授、西洋近現代哲学、「現象と自由」。

以上の11の講演のそれぞれが、独自の仕方ですべて「組織」というものを解釈した上で「生命」を論じており、それらを通じて、「生命」を考えるための一つの方向が見えてくるように思われた。

2018年度の「生命の教養学」の履修者は75名だった。内訳は理工学部44名、商学部19名、法学部6名、経済学部3名、文学部3名となり、理工学部生が半数を超えた。生命について考えるにあたって、理系の学生には文系的アプローチの可能性、文系の学生には理系的アプローチの可能性を感じさせる良い機会になったのではないかと思う。2019年4月に講義録『生命の教養学15／組織としての生命』が慶應義塾大学出版会から刊行された。

(荒金直人)



堀田耕司氏



鳥海崇氏



河野礼子氏

1 設置科目

1-3 身体知

—創造的コミュニケーションと言語力

「身体知—創造的コミュニケーションと言語力」は、夏の集中講座として開講されている。文字による物語を目で追うのみならず、からだを使って読み解き、その解釈を他者の解釈とすり合わせてみたのちに、自らも創作をしてみるという内容の授業である。本年度も8月13日から18日までの6日間、22名の通学生と通信課程生がともに学び、刺激と感動を共有した。

世代やバックグラウンドを超えたメンバー構成もこの授業の大きな特徴となっている。それだけ物語の解釈も幅が出てくるのである。

毎年、読む物語は一つの主題を決めて選ぶのだが、今年は「伝える」をテーマとした。本年度使用したテキストは、夏目漱石の「夢十夜」から「第一夜」、同じく夏目漱石の「永日小品」から「蛇」、そしてアイルランドの作家、エセル・ローハンの「どぶ (The Gutter)」、アメリカの作家、ジョー・ミノの「月の成り立ち (The Architecture of the Moon)」の4作品である。夏目漱石の小品は、漢字の効果的な活用や静かな文体の中に込められた情感、および自然と人間の一体化と相克など、言語から読み解けるものをディスカッションした後で、各自朗読を試みた。エセル・ローハンの短編はシングル・マザーに育てられる男の子の物語だが、2頁にも満たない短い物語である。しかし短いからこそ行間で起こっている様々な出来事や少年の感情など、文字化されないストーリーのかなめを読み込むことが重要になってくる。授業では、まずそれらを見つけ出す作業から入った。続いて、小さなグループでこの物語を演じてみることで、同じ物語でも、全く異なる解釈が可能であることが分かった。そして最後に扱ったジョー・ミノの作品は、ある日月がその姿を消してしまうという一見ファンタジーを装った物語が、ホロコーストという重大な史実のアレゴリーであることを読み解いた。この作品では朗読のみならず、クラスが全員で動くことで、物語の世界を22名で共に作り上げていくという実験を試みた。朗読者を次々に変えながら、その声や語られていることに合わせて皆が動き、反応しあう。そこには小さな物語の宇宙が出来上がっていた。

ちなみにローハンとミノの作品は日本語の翻訳がまだ出版されていないために、講師が翻訳を用意した。参加者は朗読しながら、自分の解釈や読みやすさに合わせて自由に言葉を変えていくことができる

からである。

その後、学生同士で「語る」、「聞く」、「聞いたことから湧き起こる心象風景を文字化する」という作業を通して、最後に各自の創作活動に入った。最終的な創作品は個人の朗読とグループによる発表会の形で一般に公開し、今年は大勢の観客を迎えて、活発な意見交換を行うことができた。

授業では、テキストを黙読するという個人作業を土台に、やがて他者の朗読からインスピレーションを受け、ディスカッションをし、語り合い、そこから自分の物語を作っていくという段階を踏んでいくのだが、その過程で自らの感覚を研ぎ澄まし、物語の世界を体感するために、様々な身体ワークショップを取り入れた。今年もペアになって外の空気を感じてみるブラインド・ウォークのワークショップを行ったほか、各自でテキストや身体ワークショップで感じたことを絵にして表現してみる、グループで絵を描いてみる、といった言語以外の表現形式のワークショップも取り入れて、文字の世界を広げていった。

身体やほかの表現形式を経ると、物語の新たな解釈が次々にわいてくる。また他者の解釈が自分の解釈と全く異なる、ということを理解するのも、自らの思い込みを変える経験となる。この経験は、世代を超えたアカデミック・コミュニティの創設につながっていく。毎年授業の終わりにアンケートを実施するのだが、本年度も授業評価は、大変良かった。大きな理由は、「素晴らしい物語に出会えたこと」、そして「素晴らしい仲間に出会えたこと」の二つである。今までほとんど文学作品を読んでこなかったという参加者は、この授業をきっかけに多くの文学作品をこれからも読もうという意欲が湧いたという。また今まで読書が好きだったという参加者も、新しい本の読み方を体験し、同じ作品を他者と読みながら、意見交換していくことの重要性に目覚めたと述べている。そしてなんとといってもそのような仲間と出会えたことは何にも代えがたい授業成果である。8月の6日間を共にした仲間たちは、令和という新しい時代を迎えてもいまだに交流を続けている。身体知の授業は持続可能なつながりを提供しているといえよう。

(横山千晶)

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-4 身体知・音楽(1)

—古楽器を通じた歴史的音楽実践—

教養研究センター設置科目である「身体知・音楽」は、2018年度においては従来通り2つの授業が開講された。一つは「古楽器を通じた歴史的音楽実践」であり、他方は「合唱音楽を通じた歴史的音楽実践」であった。これら授業は、株式会社白寿生科学研究所からの寄付を受けた寄附講座であった。2018年度を通じてそれぞれの授業では、充実した教育が行われた。「古楽器を通じた歴史的音楽実践」の授業では、古楽器と呼ばれる、17・18世紀に作られた楽器、もしくはそれを今の時代において復元された楽器を用いて、バロックの時代の音楽を演奏することで、当時の作曲家、演奏家、そして聴衆が音楽をどのように捉えていたのかということを探求していくことを目的としている。授業で使用している楽器は、バロック・ヴァイオリン、バロック・ヴィオラ、バロック・チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェンバロ、テオルボ、バロック・オーボエ、フラウト・トラヴェルソ、バロック・ファゴットなど多岐に渡る。参加者の数は30名を超え、これほどの規模のバロック・オーケストラ / アンサンブルを恒常的に擁しているところは、教育機関および商業的活動を行っている団体を含めて、日本にはほとんど存在しないと言っても過言ではない。なお、2018年7月7日「マルコ・ウッチェリーニの音楽」と2019年1月20日「～フランス音楽いつまでも、どこまでも～」に藤原洋記念ホールで成果発表演奏会を開いた。1月の演奏会は、横浜市と提携されたイベントでもあった。

(石井 明)

株式会社白寿生科学研究所寄附講座事業
慶應義塾大学教養研究センター寄附講座委員会 (HAPP) 2018年度企画 古音楽祭2018 第1回

慶應義塾大学 古楽アカデミー 室内アンサンブル演奏会

マルコ・ウッチェリーニの音楽

慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー (ピリオド楽器使用)
全体指導・チェンバロ：石井 明

Regnum
マルコ・ウッチェリーニ
(王君の余暇 (Ozio regio)) 作品7 (1660) より

マルコ・ウッチェリーニ (1680-1717) 晩年中頃、その父のモデル・パルマで活躍したヴァイオリン奏者・作曲家。彼の死後については、詳細な情報が残されていない。少ない作品量と経歴上の空白から、その音楽の特色は、(音楽の専門) 知識には不慣れなピエモンテで育ちの作曲家に、その作品は、フランス風演奏法やフランス風の編成を帯びたアンサンブル、6声部は通奏低音の大きなアンサンブルを求められてはいるものの、それでは、その音楽では、ヴァイオリンのためのソナタを皮切りに、1声部ずつ編成が入り交った作品が数多くある。その音楽の特色は、フランス風のアンサンブルを組んでいる。

2018年7月7日(日) 14時開演 (13時30分開場)
大場無料 事前申し込み不要

藤原洋記念ホール

(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)
アクセス：東急東横線・東急目黒線・横浜鉄道地下鉄グリーンライン 日吉駅徒歩1分

【主催】慶應義塾大学教養研究センター・日吉行政企画委員会 (HAPP) 慶應義塾大学日吉音楽研究委員会 (HAP) | 慶應義塾大学日吉音楽研究センター | 045-556-1330 | <http://www.music.jp>

Design: Art Minnick

株式会社白寿生科学研究所寄附講座事業
クラシック・ヨコハマ2018 大学音楽コンサート

慶應義塾大学 コレギウム・ムジクム・ 古楽アカデミー・ オーケストラ演奏会

～フランス音楽いつまでも、どこまでも～

慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー・オーケストラ (ピリオド楽器使用)
全体指導・指揮：石井 明

Regnum
シャルル・ドマージュール (1669-1730) 《サンフォニー集 (1702)》より組曲第2番変ロ長調
ゲオルク・ムファット (1653-1704) 《12のコンチェルト集 (1701)》より奏楽曲第12番長調 (慈悲深い天)
フランソワ・フランクール (1698-1787) 《アルトゥーロの饗宴のためのサンフォニー (1773)》より組曲第2番短調
ジャン・フェリックス・ルベル (1666-1747) 《ファンタジー (1729)》＝長調 他

フランス・バロック音楽は、その多岐にわたるジャンルの中で発展してきました。その中で、特に曲を編み出した作曲家の心的な役割を担っています。その影響力は大きく、何人かのフランスの作曲家は、その音楽的遺産を後世に受け継いでいます。その中でもフランスの作曲家、マルセル・ドマルティン・ドマルティン・ドマルティン、そしてフランスで音楽を学んだ作曲家ジャン・フェリックス・ルベルの作品を通じて見られます。その中には、イタリアの美しい音楽が取り入れられ、伝統的なフランス音楽を長く残したフランクールの作品を取り入れています。

2019年1月20日(日) 14時開演 (13時30分開場)
大場無料 事前申し込み不要

藤原洋記念ホール

(慶應義塾大学日吉キャンパス協生館内)
アクセス：東急東横線・東急目黒線・横浜鉄道地下鉄グリーンライン 日吉駅徒歩1分

【主催】慶應義塾大学教養研究センター・クラシック・ヨコハマ2018企画委員会 | 慶應義塾大学日吉音楽研究委員会 (HAP) | 慶應義塾大学日吉音楽研究センター | 045-556-1330 | <http://www.music.jp>

Design: Art Minnick

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-4 身体知・音楽（2）

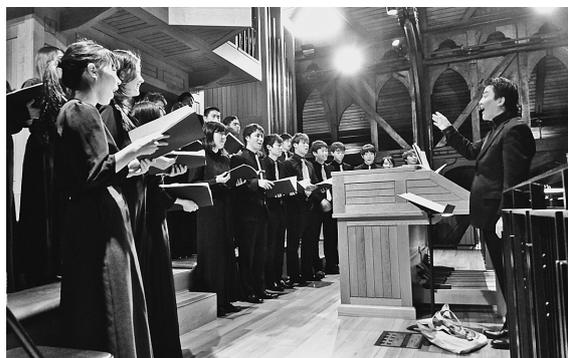
—合唱音楽を通じた歴史的音楽実践—

株式会社白寿生科学研究所の助成により、同寄附講座「身体知・音楽」を実施した。本講座は、大学教養教育における音楽教育の可能性を広げ、ひとつのモデルをうち立てる事業である。

そのうちの声楽アンサンブル授業は、佐藤望（商学部教授）が担当し、これにヴォイス・トレーナーとして、声楽家の藤井あや氏、青木海斗氏が指導に加わった。今年度は、2018年8月8日にアンサンブル・ヴァガボンズ（下野竜也指揮）と共演し、ガブリエル・フォーレの《レクイエム》などを演奏した。さらに3月には、未来先導基金の支援を受け、ブリティッシュ・コロンビア大学と共同でアーリーミュージック・バンクーバーとの協力事業コンサートを実施のため、カナダ遠征を実施した。カナダ公演でのパートナーはUBC音楽学部で、同学部のバロック・オーケストラ・メンターシップ(BOMP)が参加した。その指導者のアレクサンダー・フィッシャー教授、UBC学生、パシフィック・バロック・オーケストラ(PBO)が協働に加わり、指揮者のアレクサンダー・ヴァイマン氏が、現地での合同演奏の指揮・指導にあたった。現地音楽NPOであるアーリー・ミュージック・バンクーバー(EMV)(代表マシュー・ホワイト氏)が、慶應義塾大学コレgium・ムジクムの受入をし、演奏会を主催した。

声楽グループは、プロのアンサンブルおよび指揮者と本格的な公演を成功させ、さらにははじめての海外公演を成功させたことは、非常に大きな意義があった。2019年3月3日クライストチャーチ大聖堂礼拝での奉唱、同日聖アンドリュー・アンド・ウェスレー教会夕礼拝での奉唱、3月6日バンクーバー三田会の歓迎レセプション参加、3月7日バンクーバー日系社会福祉施設「隣組」でのミニコンサート、そして3月8日のメインのコンサートなどの日程をこなし、音楽的にも、人間的にも多くの学びを得た。国際交流や、プロの音楽家との交流でできた繋がりを今後どのように生かしていくことができるかが、今後の課題である。

(佐藤 望)



3月3日 クライストチャーチ大聖堂礼拝堂にて



3月6日 UBC School of Music でのリハーサル



3月8日演奏会の様子 (EMV 提供、撮影:Jan Gates 氏)

II 教育開発関連プロジェクト

1 設置科目

1-5 身体知・映像

2018年度の身体知も最初の選抜試験が肝心だった。限られた時間のなかで、数十名の履修希望者のなかから20名の受講生を選ぶことは、半端なことではない。オーディションの演技と受講希望書のアンケートの内容を精査し、教員サイドの4人で夜遅くまで徹底的に議論することによって、20名を決定するのだから。こうして選ばれた20名の受講者と4名の教員で、一年間を通じて、一緒に授業を作っていくことの喜びは、身体知クラスの醍醐味である。

「身体知・映像」クラスは、映像言語の読み方だけでなく、映像言語の作り方を伝授する点に、オリジナリティがある。共同的な映像制作を通じて、学生は身体をフルに使用して、共感的な想像力を養いながら、言語と視覚言語の理解を深めていく。また学生は演技を通じて自己の身体の動かし方や感情の表現方法を学習し、シナリオの作成を通じて物語世界のリアリズムを理解し、撮影と編集演出を通じて映像言語の論理を学びとる。こうした一連の身体能力こそ、ここで「身体知」と呼んでいるものに他ならない。このような身体知の実践は、頭と身体を切り離しがちな教養教育に対するひとつのオルタナティブとなる教育実践であり、その存在には大きな教育的な効果または意義があると考えられよう。

上記のコンセプトを4人の教員でシェアしたうえで、本年度は以下のような映像制作プロジェクトを実行した。春学期は、3つのグループに分かれて、オリジナルの脚本に基づいた短編映画の制作を行った。エチュードを繰り返しながら、自然な物語を生み出していく、それを映像化するのが目的だ。秋学期は、春学期の予備作業を経て、いよいよ原作のある短編に基づいた映画作品の制作に取り組んでいく。今年は、実験的にわずか2ページ程度の超短編を使用して、学生の想像力を試した。マイケル・オープンハイマーの「果物ナイフ」、ブルース・イアソンの「アパラチアン・トレイル」、ズドラフカ・エフティモファの「血」の3作である。横山千晶先生の翻訳を使い、合計4作の秀作が誕生した。いずれも傑作である。

最後に一言。本授業は協働学習を通じて、他者と共に一つのものを作り上げるアカデミック・コミュニティの構築を基礎としている。コミュニティビルディングの第一人者である坂倉杏介先生、そして本授業の卒業生であり、長年TAを務めて、現在第

一線で活躍する若手映像作家の山田健人君のきめ細やかな指導に心から感謝したい。（佐藤元状）



2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新的话题を提供することを目的とした講演シリーズである。2018年度は、「情報の光と影」をテーマに講演を6回開催した。

春学期は、情報の利用に注目した講演3件を開催した。まず、福井健策氏（弁護士）は、漫画やアニメの海賊版オンラインサイトを題材に、著作権違反の取り締まりを阻む要因および解決しなければいけない課題を取り上げた。次に、田代光輝氏（政策・メディア研究科特任准教授）は、社会分断につながる危険性について述べた。それは個人の意図的な行動の結果ではなく、何気なく意見の合う情報を取得しようとして集団を形成するためである。最後に、堀潤氏（ジャーナリスト）は、ネットから得る情報による大衆操作の危険性を指摘し、例えば主語一つとってもその“大小”で意味が大きく変わることを述べた。いずれの講演も、インターネット上での情報の受発信に関わることであり、ネット利用における落とし穴や注意点を知る機会として、非常に貴重であった。

秋学期は、情報技術に注目した講演3件を開催した。まず、Google 合同会社のソフトウェアエンジニアにより、エンジニアという職種の紹介とともに、大学の授業がどう就職後に役立つかについて講演された。次に、岡田美智男氏（豊橋技術科学大学教授）は、何かをきちんと行える通常のロボットに対する発想とは真逆にとらえた「弱いロボット」をテーマに講演された。そこでは、ロボットが“できない”ことを通じて、人間との新たなコミュニケーションが生まれる様子を議論した。最後に、小池康博氏（理工学部教授）は、フォトニクスポリマーという素材とそれのディスプレイへの応用を講演された。純粋な技術の話で終えず、イノベーションが生まれる話やビジネスにつなげる話など、盛りだくさんな講演であった。いずれの講演も、中心は技術ではあるものの、授業の重要性、研究における心構えなど、一人前の技術者となるために非常に参考になるものであった。

一部の講演は YouTube 上で公開されており、情報の教養学のホームページ (<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/>) から視聴できる。

(高田眞吾)

2018年度情報の教養学第1回講演会
慶應義塾大学教養研究センター主催

ネットの ダークマター

止まらない
海賊版で
マンガ・アニメ
は滅びるのか？

5月9日
18:15~19:45 (水)

講師：福井健策
弁護士（日本・ニューヨーク州）
日本大学芸術学部・神戸大学大学院客員教授

場所：日吉キャンパス 来往会1F
シンポジウムスペース

対象：塾生・教職員（無料予約不要）
問い合わせ：toiwase-lib@edst.keio.ac.jp

2017年、オンライン海賊版はそれまでとは異次元と言える急拡大を遂げた。現在、最大のサイトの月間訪問者は約1億6000万人。ほとんどは国内利用者で、技術に法律が追いつかず対策の目途は立たない。我々は、著作権などあっても役に立たない時代に突入したのか？マンガ/アニメ、そして情報社会のゆくえを探る。

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp> @KeioLearning

福井 健策
弁護士（日本・ニューヨーク州）
日本大学芸術学部・神戸大学大学院客員教授
1991年東京大学法学部卒
1993年弁護士登録
（第二東京弁護士会）
米国フロリダ大学法学校（セントラル）に法務学博士号取得
フィリピン・シンガポール国立大学リサーチフェローなどを経て、現在、弁護士（法務事務所）として、主に「著作権の権利」「知的財産」を軸とする。CRG、「ネットの自由」をテーマとした著作、18歳の著作人入門「作くまリマ」新書ほか、自由情報研究会の代表理事。「本の未来基金」運営委員。「電子と法」研究会の代表理事。著書、DVD、CDなど、東京大学大学院客員准教授なども務める。

2018年度情報の教養学第2回講演会
慶應義塾大学教養研究センター主催

集団極性化や社会の分断 炎上とサイバーカスケード

5月16日
18:15~19:45 (水)

講師：田代光輝
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任准教授
場所：日吉キャンパス 来往会1Fシンポジウムスペース
対象：塾生・教職員（無料予約不要）
問い合わせ：toiwase-lib@edst.keio.ac.jp

田代 光輝
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科特任准教授、9年慶應義塾大学情報科学部客員准教授、IT企業等でプログラムの開発マネージャーを経て、現職。

スマートフォンやSNSの普及等により、だれでも気軽に発信できる環境が整った。ネットを介した「良き」つながりが増える一方で、様々なトラブルも発生している。座間や八王子で発生した誘い出し事件や、ネットいじめなども起こっている。

一方で、ネットそのものが、社会全体の分断を促進することが危惧されている。米国大統領選挙、英国のEU離脱、バスケットボール問題、仏の右傾化など、ネットが及ぼす社会分断が顕在化している。本講演では、ネットいじめや炎上トラブルを含め、ネットと社会のかかわりについて述べる。

<http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp> @KeioLearning

フェイクニュース と民主主義

いま私たちが為すべきこと

堀潤

ジャーナリスト・キャスター

5月21日(月)
16:30~18:00

場所：日吉キャンパス 第4校舎6棟39番教室
対象：学生・教職員
(無料 予約不要)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp



堀潤 ジャーナリスト・キャスター
NPO法人8bitNews代表理事、株式会社GARDEN代表

1977年生まれ。元NHKアナウンサー。2001年NHK入局。「ニュースワッチャー」リポーター、「B1は天竺」キャスター。2012年米国ロサンゼルスでのUCLAで客員研究員、日本の原発メルトダウン事故を追ったドキュメンタリー映画「変身 Metamorphosis」を制作。2013年、NHKを退局しNPO法人「8bitNews」代表に。2016年、株式会社GARDENを設立。

現在出演しているメディアは、TOKYO MX「モーニングCROSS」キャスター、J-WAVE「JAM THE WORLD」ニュース・スポーツリポーター、akibaTV「AkibaPrime」コメンテーター、放送大学客員教授、毎日新聞、ananなどで多数連載中。

http://ce.lib.arts.hc.keio.ac.jp @KeioLearning

インターネットやSNSが発達し誰もが発信できる時代になった。一方で発信に大きなリスクを感じる時代にもなった。

私たち一人一人の何気ない発信が差別や偏見、誤解や分断を助長してしまっているかもしれない。民主主義を定める事柄にも発展している。

いま私たちがどのような技術を身につけるべきなのか？メディア側の視点からそのスキルを受講生と共有していきたい。

〈弱いロボット〉的 思考のすすめ

他力本願なロボットがひらく
弱いという希望、できないという可能性



「ひとりできるよになるんだよ」という期待のもと、子どもたちも「もうひとりできるもん！」と得意がる……。わたしたちはこの「ひとりできる」ことをよしとする文化の中で育ってきたのです。

本講演では、いつも強がるだけでなく、時には自らの「弱さ」を自覚しつつ、それを適度に開示することで生まれる、人とロボットとの豊かな関わりやコミュニケーションについて考えます。



10月31日(水)
18:15~19:45

岡田 美智男

豊橋技術科学大学情報・知能工学系 教授
1967年、慶応義塾大学理工学部理工学系 情報科学専攻、工学修士、IT工学専攻修士、情報科学専攻 学芸員、国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)、京都大学大学院情報科学部研究開発院 研究員などを歴任。2006年より現職。『弱いロボット』著者の一冊である。2017年度学術振興会特別奨励賞(自然科学系)を受賞。

専門は、ヒューマン・ロボットインタラクション、社会型ロボティクス、コミュニケーションの認知科学。主な著書：『弱いロボット』の著者、わたしの身体・コミュニケーション(講談社現代新書、2016)、『弱いロボット』(医学書院、2017)、『ロボットの楽しみ コミュニケーションをめぐる人とロボットの交差点』(共編著、朝倉社、2016)など。

http://ce.lib.arts.hc.keio.ac.jp @KeioLearning

フォトノクスポリマーが拓く 未来情報化社会

材料の機能がシステムを変える

11月7日(水)
18:15~19:45

小池 康博

慶應義塾大学理工学部 物理情報工学科 教授

フォトノクスポリマーが支える情報化技術の最前線

世界最速 プラスチック光ファイバー
超リアルカラー ディスプレイ



講師：小池 康博
慶應義塾大学理工学部 物理情報工学科 教授
場所：日吉キャンパス 来往舎1F シンポジウムスペース
対象：学生・教職員
(無料 予約不要)
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

1982年慶應義塾大学大学院博士課程修了。1997年～同大学教職。1989年～1999年米国ベル研究所研究員。2000年～JST ERATO 086 結晶色素、ITO/OLED 2次元材料。2010年～京大先端科学技術推進センターIPD17プログラム 中心研究員等を務める。専門は世界最速プラスチック光ファイバー、高精細ディスプレイ等。フォトノクスポリマー、POFネットワーク会議委員、International Cooperative of Plastic Optical Fiber 議長等を兼任。2007年～アントワーペンヘン大学名誉博士。藤原賞、飛騨賞、SID Special Recognition Award 等を受賞。

http://ce.lib.arts.hc.keio.ac.jp @KeioLearning

3 実験授業

3-1 庄内セミナー

2018年度・第9回庄内セミナーは、8月29日から9月1日にかけて、例年通り山形県鶴岡市の鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点に、「庄内に学ぶ〈生命〉——心と体と頭とー」というテーマで行われた。今回は猛暑に加えて強い雨にも悩まされ、一部予定の変更を余儀なくされたが、全体としては順調にプログラムをこなすことができた。また、この4日間の体験を通して「生命」について参加者一人ひとりが感じ取ったこと、仲間と語り合ったこと、ひとりで考え深めたこと、理解できたことを振り返り、自分なりの言葉にまとめた報告書も発行されている。

ところで、9回目を迎えた庄内セミナーは、2008年度の鶴岡セミナーを加えると通算で10回目となる。これをひとつの区切りと考えて、なぜ庄内か、について少し確認しておきたい。

庄内は小さな宇宙だ—庄内セミナー（初回のみ鶴岡セミナー）を立ち上げたときから、この思いは一貫して変わっていない。まずは自然。日本海、庄内平野、鳥海山から出羽三山、朝日連峰につながる美しい山並みからなる庄内の自然はそれ自体がひとつの宇宙を構成している。そして、庄内に暮らす人々が長い時間をかけて築き上げてきた歴史がそこに豊かな陰影を投げかけている。それは、たとえば日本人の意識の基層ともいべき山岳信仰や羽黒修験道にとどまらず、武家や商家、農家、漁家の活々とした営みが生み出した生活文化として現在を形作っている。しかし、それにとどまらず、未来へと向かうさまざまな試みが展開されることで、まさに時間と空間が織りなす有機的宇宙として、庄内はわたしたちにさまざまなことを語りかけてくるのである。「生命」をテーマとし、短期間とはいえ、それを「心と体と頭」を使って考え、体験し、五感にしみ込ませていくフィールドとしてこれほど相応しい場所はほかに考えられない。庄内なくして庄内セミナーなし、と言ってもよいだろう。

今年度のセミナー参加者は23名。学部も多岐にわたり、また他の大学院や国外の大学に進学した「塾員」資格の参加者もいた。こうしたバックグラウンドの異なる参加者たちが、それぞれの特性を活かして自分たちでセミナーを作り上げていく—それも庄内セミナーの大きな目的である。

グループに分かれた参加者たちは、まずスタート時点での自分たちの生命観、死生観あるいは生や死

にまつわる個人的体験などを可視化するためにマインドマップを作成する。そして、本格的なアクティビティが始まる。その柱は大きく三つ。一つ目の柱は、古代からの生命観を追体験・体感するもので、2日目の注連寺での即身仏の拝観と住職の佐藤弘明氏の講話、3日目の修験体験と指導いただく先達のお話、議論・対話がこれにあたる。二つ目の柱は、「生命」をめぐる最先端の営みに触れることで、2日目の先端生命科学研究所のバイオリボ棟見学と所長の富田勝氏（環境情報学部教授）のお話、その夜の岡野栄之氏（医学研究科委員長・医学部教授）による最先端をいく再生医療の領域から考える「生命」についての講義と議論・対話から構成されている。

三つ目の柱が、一方では古くからの伝統と伝統を守り、人間の営みを伝えつつ、他方では新しいバイオテクノロジーを中心とした新たなサイエンスの世界を開拓し、育んでいる庄内そのものの「生命」を理解することである。初日、酒井忠久氏（致道博物館館長）による熱のこもった庄内を俯瞰するお話、地元出身の詩人・吉野弘の作品を手がかりに「生命のやさしさと厳しさ」を語ってくださった東山昭子氏（鶴岡市総合研究所顧問）の講演、2日目の地元食材を使った郷土料理を味わう知恵軒での昼食、旧藩校・致道館での富樫恒文氏のご指導による庄内論語の素読体験などを通じて、参加者は庄内と正面から向き合うことができた。

こうした時間を共有することで、参加者たちは普段の生活では得られないものを体得していく。そして、この一連の体験を終えたあと、自分の死生観、生命観はどのように変化したか、そのことを確認するために、もう一度、マインドマップを作成する。このマインドマップもセミナー報告書に掲載してあるので参照されたい。

最後に、この庄内セミナーでは、鶴岡市長の皆川治氏をはじめ、鶴岡市役所、鶴岡市内の関係各所より、心の籠ったご理解、ご協力、ご援助をいただいた。ほんとうにありがたいことだと思う。ここに、あらためて深く感謝申し上げる次第である。

（羽田 功）

慶應義塾大学教養研究センター主催

第9回 庄内セミナー



「庄内に学ぶ<生命 (いのち)>-心と体と頭と-」

ミニ山伏体験・即身仏拝観・TTCK 先端生命科学研究所見学・講義と対話・地元との交流を通して庄内地方の歴史・文化・自然を体感して「生命」をめぐる幅広い「学び」を体験します。

期間：8月29日（水）～9月1日（土）3泊4日

場所：山形県鶴岡市（鶴岡タウンキャンパス他）

定員：30名 対象：慶應義塾大学学部生・大学院生、塾員

参加費用：無料 ※現地までの交通費は自己負担。現地集合・現地解散です。



★説明会開催★ ご興味のある方、ご参加下さい！

6月5日（火）18:15～19:45

日吉キャンパス来待舎2階 大会議室

■参加申込

6月5日（火）～7月13日（金）午前中まで

■詳細・申込

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/shona/>



お問合せ：toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

庄内セミナーポスター



マインドマップ作成



火渡り



注連寺での講話



庄内論語素読体験



山伏体験



メディアセンター関連図書展示

3 実験授業

3-2 過去から未来を紡ぐ「日吉学」

◇目的

日吉キャンパスは普通部から大学院までを擁する一貫教育の場であり、かつ広大な自然と多様な地形に歴史遺産が点在する稀有なキャンパスである。この特質を生かし、慶應義塾が誇る自然や歴史の素材を活用する教育プログラムを練り上げた。受講対象者を一貫教育校の普通部生から大学院生までとする事で、多角的な視点の共有と刺激的な討論を促し、また複数領域の講義と体験を組み合わせ、深い思考を陶冶する「主体的に考える学びの場」をめざすことを「日吉学」設立の目的として掲げ、実験授業を重ねてきた。2018年度は実験授業の最終年で、2019年度の寄附講座開講に向けて「景観編」の日吉学プログラムを展開し、シラバスの充実をはかった。

◇活動内容

近世以来、下末吉台地一帯の典型的な農村だった日吉がどのようなきっかけで大学街として大きくその姿を変えていくことになったのか。日吉キャンパスは当初どのような理念のもとで設計され、その後戦争や高度経済成長などの激動の時代を経て、その姿かたちを変えていったのか。こうしたキャンパスの景観の変遷に関わるさまざまな疑問に対し、単に文字による記録を読み解くだけでなく、建物や植生、地形などの多角的な視点からのフィールドワーク、古写真の調査を通じて、歴史・自然・地理の3分野に跨る広い枠組みから考察する実験授業を、正規授業化にむけて180分授業を実施した。

2018年9月22日は日吉学の趣旨説明（経済学部不破有理）の後、まず講義（文学部安藤広道）で景観史を通してキャンパスデザインを考える視点を提示した。その後グループごとにフィールドワークを行い、キャンパスで残したい場所や場面を写真に収め、その後グループ発表。9月29日は、1932年に林塾長が掲げた「理想的学園を建設する」という思いは第一校舎やキャンパスのデザインに読み取れるのか、講義（慶應義塾高校阿久澤武史）の後、実地見学し、最終課題をグループで話し合った。10月6日は、人はなぜ緑を見ると快適と感じるのかという問いの講義（経済学部福山欣司）から始まり、成長と季節変化を経る緑がキャンパスの景観へ及ぼす影響について、グループで考察・発表。20枚もの日吉の航空写真を時代順に並べ替える作業には、学生も教員も大興奮。最終レポート作成に向けてアカ

デミック・スキルズのミニ講義（法学部大出敦）を実施。10月13日は地形的特徴から日吉の立地を選んだ理由を考える導入講義（普通部太田弘）の後、地図から社会事象を読み解く第一人者今尾恵介氏の基調講演と質疑。鉄道の交通網の発達過程と田園都市構想を学び、大学誘致の理由をグループで推測、将来の慶應義塾の仮想Hubの立地を考え、グループ発表。10月20日はグループで発表のテーマと分担について、アカデミック・スキルズ修了生と教員のサポートの下、発表に向けて準備。10月27日はグループ発表のリハーサルと本番。教員や仲間から集中砲火を浴びつつ、無事発表終了、「日吉学修了証」の授与を行った。いずれの発表も異なるキャンパスと学部、一貫校生が学べる「交流の場」や多様な学生や教員が出会える「広場の拡充」を望む結論となったことが印象的であった。2019年1月12日には個人のプレゼンテーションを行い、レポートと発表の優秀者を表彰した。

◇成果

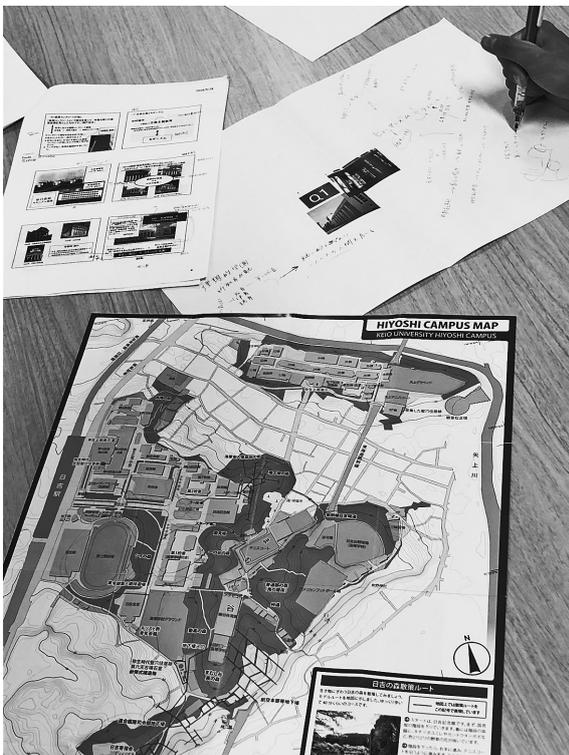
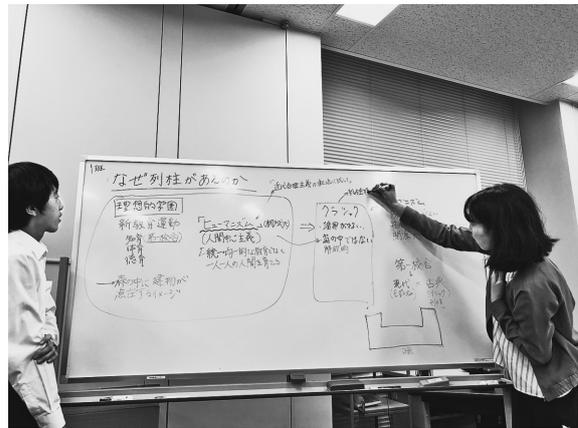
これまでの大きな収穫は新日吉キャンパスマップの作製、そして教員・学生にとって新しい学びの場が誕生したこと。教員同士は教育手法を学び合い嬉々として情報を交換し、一貫校の生徒と大学4年生が共同発表をまとめるなど、新鮮な教育の組み合わせによる効果が次々と生まれた。5年余の実験授業の期間を経て、2019年度から、株式会社コーエーテクモホールディングスからの寄附を得て、正規科目として開講されることになった。

◇参加者の声

・2年連続で受講しましたが、日吉学をひと言で表現すると「贅沢な授業」という言葉がピッタリだと思います。先生方がそれぞれの専門分野について教えて下さり、一つのテーマについて様々な視点から考えるという事を経験できるのは貴重な機会だと思いました。また、大学生の方々と同じグループでプレゼンをするので、高校生の僕にとっては普段の授業よりも高度なレベルで学習する事が出来、とても新鮮で刺激的でした。授業の雰囲気もとてもアットホームで、このような授業は他に経験したことがありません。日吉学を受講する事によって学びの楽しさを実感する事ができました。このような機会を与えてくださった先生方に感謝しています。ありがとうございました。（慶應義塾高校2年）

・ 普段見ていた風景を起点に日吉の過去・未来を想像するのは刺激的で、日吉生活を1年しか経験しなかった私にとって、キャンパスを舞台に“日吉の先輩”たちと学び合い、考え、議論する機会として毎回興味深く取り組むことができました。
(文学部4年)

(不破有理)



慶應義塾

2018年度「日吉学」
景観編修了証
(建築編・地理編・自然編)

学部 君

貴君は2018年度の「日吉学」景観・キャンパスデザイン編の様々な活動に積極的に参加したことを称え、栄えある「日吉人」であることを認め、証します。

2018年10月27日

慶應義塾大学教養研究センター
所長 小菅隼人
「日吉学」コーディネーター 不破有理

4 「学び場」プロジェクト

慶應義塾大学の日吉のメディアセンターの1階には、学習相談員のカウンターが置かれている。レポートの書き方、授業でのノートの取り方などについて、学生の相談に乗り、適切な作法を伝授する。かなり高度な仕事の内容を課された相談係である。その種の役割を果たす相談員を図書館等に配するのは慶應義塾の独創ではない。他大学にも居るところは多い。でも、そこで相談にあっているのは、大抵は図書館の職員か大学院生であろう。しかし、日吉のメディアセンターの場合は、主に学部生である。学部生を正規の学習相談員として大学が雇用することは、日吉が日本では先駆けであり、今日も類例は乏しいと思われる。

この日吉の制度は、教養研究センターと日吉メディアセンター、日吉学生部の共同事業として成り立っている。教養研究センター設置授業のアカデミック・スキルズを履修した学生がそこで学んだスキルを活かし、アカデミック・スキルズを履修しない学生にも広く伝えられないかと考えたのが、制度誕生のきっかけである。とはいえ、学部生で必要な相談員の人数を賄いきるのは難しいところもあり、また大学院生レベルの知識と経験も欠くべからざるものなので、実際は例年、院生の助けも借りている。2018年度の学習相談員は、大学院後期博士課程3名（うち法学研究科2名、社会学研究科1名）、修士課程1名（法学研究科）、学部4年生3名（法2名、商1名）、3年生7名（経1名、法4名、商1名、理1名）、2年生5名（文1名、経2名、理2名）、そして法務研究科（法科大学院）1名、以上計20名で構成された。院生にも学部生時代にアカデミック・スキルズを履修した者が含まれている。

2018年度の学習相談カウンター業務の実績は、相談件数にすると春学期が233件、秋学期が136件、通年で369件となる。2009年度から2015年度までの通年の相談件数を順に示すと、179件、195件、325件、423件、447件、554件、615件、644件と推移し、そして2017年度が631件であった。つまり2017年度に、2009年度以来、ずっと右肩上がりであり続けていた相談件数が初めて減少し、といえども前年度2パーセント程度で横ばいと形容してもよいものであったのだが、2018年度には、前年比で約4割も減少するという、劇的な落ち込みを示した。

急変の原因は何か。カウンターの相談業務の質や、業務の広報について例年と格段の変化はないと思われる。とすれば、学生の学習環境やそれに伴う相談の需要に変化があるのではないかと想定される。もしかすると、レポートを課する授業が減っているのかもしれないし、学生がレポート作成やノート・テーキングについての悩みを別のチャンネルで解消することが増えているのかもしれない。あるいは現場での相談者のカウントの仕方に何らかの違いが生じているのかもしれない。理由の究明は力及ばず不十分である。2019年度の推移を見守りつつ、適切に対応したい。

(片山杜秀)



学習相談

共催：教養研究センター・日吉メディアセンター・日吉学生部

書評ってどう書くの？
引用ってこれで合ってるのかなあ...
レポート課題が出たけど何から始めればいいの？

**友達や先生には聞けない勉強の疑問、
学習相談で相談してみませんか？**

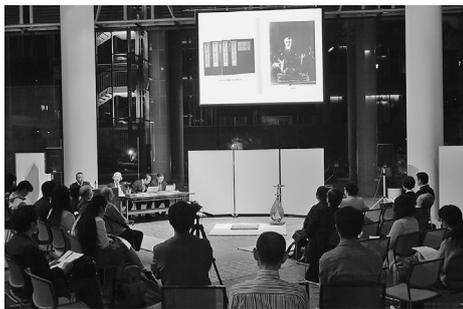
- ✓活動期間
4月23日(月)～7月20日(金)
- ✓時間
平日 13:00～18:00
- ✓場所
日吉図書館1F スタディサポート
- ✓利用方法
受付時間内にお気軽に窓口へお越しください。
- ✓予約もできます
日吉メディアセンターHPより
<http://www.hc.lib.keio.ac.jp/studyskills/consultation.html>

1 日吉行事企画委員会 (HAPP)

日吉行事企画委員会 (HAPP) は2018年度より、「新入生歓迎行事」の枠組みを廃止し、地域住民を含む、より幅広い日吉コミュニティーを対象に企画を実施することになった (なお、各々の催しを「新入生歓迎行事」として位置付けることはできずとした)。HAPPの活動は、2つの異なるタイプの企画を柱としている。一つは、主に春学期に行われる、委員会が企画した催し物で、他方は、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択したイベントを秋学期に主催・開催している。2018年度のHAPP企画は、8つの企画がスケジュールされ実施された。毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、塾長との交流を目的の一つとしている「塾長と日吉の森を歩こう」、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」に加え、昨年に引き続き、日吉メディアセンターの中でコンサートが春と秋に催された。

2018年度秋学期においては、これまでと同様、春学期中に公募を行い、審査を経て採択を決定した企画の実行を核とした活動を展開した。2018年度に採択された公募企画は、教員企画3件、学生企画が1件であった。これらは、9月末に行われた、現代のメキシコを紹介する映画上映およびインスタレーション展示、10月に行われた、薩摩琵琶についての講演およびこれを用いた演奏会、女性の働き方などを学生の間で集まり考えていくという企画、そして国連 UNHCR 難民映画祭の学校パートナーズとして参加したイベントとなった、〈難民映画祭 @慶應〉であった。いずれも活気のある催しものとなり、地域住民を含むたくさんの来場者を見た。HAPPの活動が、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献していることが確認できた。

HAPPの活動については、HAPPのホームページ (<http://happ.hc.keio.ac.jp/>) で確認できる。
(石井 明)



○慶應義塾大学 新入生歓迎!

2018年4月7日(土)
14:00~

慶應義塾大学日吉キャンパス
〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

来往舎1階
シンポジウムスペース

問合せ先 E-mail:hy-happ@adst.keio.ac.jp

「歌舞伎のみかた、楽しみ方」

歌舞伎は「歌舞が面白い、難しい」と思っている人ばかり。演劇評論家・犬丸治氏の解説で、あなたも歌舞伎を観るのがもっと面白くなる!

講師 犬丸治 (いぬまる ぢぢ)

主権:慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会(HAPP)
企画:慶應義塾大学歌舞伎研究会

新入生歓迎演奏会(物語の世界)no.5
ドストエフスキー『悪霊』の世界

2018年5月23日(水) 18時15分~20時 (開演)

慶應義塾大学日吉キャンパス D201(講堂) | 入場無料・予約不要

2018年5月23日(水) 18時15分~20時 (開演)
主権:慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会(HAPP)
企画:慶應義塾大学音楽部

前を向いて。その一歩を踏み出そう。

10/12(金)
12:30~15:15 12:00開場

日吉キャンパス 来往舎シンポジウムスペース
入場無料 途中参加・退出可 飲み物とお菓子をご用意しています

EMPOWERMENT CAFE
女性社会人によるレクチャーや交流会を通して、自分の未来について考えてみませんか?

レクチャー・パネルディスカッション・交流会
佐久間恵祐 山近祐加子
一般参加者 LEAN IN Tokyo

主催:慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会(HAPP) 問い合わせ:empower.keio@gmail.com

2018年度 HAPP 企画

No	企画名	日程
1	歌舞伎のみかた、楽しみ方 犬丸治氏講演会	4月7日(土)
2	壺井明 連作祭壇画『無主物』の展示と講演会	4月23日(月)~4月27日(金)
3	ライブラリリーコンサート in 日吉 —図書館がコンサートホールになる2日間—	5月15日(火)、5月22日(火)、10月26日(金)
4	〈物語の世界〉no.5: 亀山郁夫講演会 —神になりたかった男 ドストエフスキー『悪霊』の世界—	5月23日(水)
5	塾長と日吉の森を歩こう	5月26日(土)
6	雪雄子舞踏公演	6月8日(金)
7	ことばの世界No.4: 大谷弘道講演会 —ドイツ語から見たドイツ人—	6月19日(火)
8	日吉音楽祭 2018	7月7日(土)、10月6日(土)

2018年度 HAPP 公募企画

No	企画名	日程
1	記憶の足跡 —メキシコ麻薬戦争の真実 語り始める行方不明者家族—	9月25日(火)~28日(金)
2	薩摩琵琶から見る明治維新150年 —琵琶歌「城山」に至る物語—	10月12日(金)
3	Empowerment Café —前を向いて。その一歩を踏み出そう。—	10月12日(金)
4	KEIO REFUGEE WEEK 2018	10月29日(月)~11月9日(金)

2 日吉キャンパス公開講座

前身の「横浜市民大学講座」から数え 45 回目を迎えた 2018 年度「日吉キャンパス公開講座」を 9 月 29 日から 11 月 17 日の日程で開催した。

2018 年度のテーマについては、4 月 10 日に実施した公開講座運営委員会において、委員長の提案した「ルールと作法」に決定し、講師陣については委員長提示の素案を元に、委員からも多数の提案があり、委員会として候補者リストを作成し、順次講演依頼を行った結果、後述のような陣容となった。

開催にあたり、テーマ概要として示した文章は以下の通りである（この部分のみ原文のままとするため、丁寧語で記すこととする）。

人間界には様々なルールや決まり事があり、それらに従って日常生活を送っています。

またそれらには必ず適用範囲があり、どのような事例・組織に適用するか、されるかを把握しておく必要がありますが、明確でない場合もしばしばで、ルールを知らないがために損をしていることも多いのではと推測します。

時として、新しい概念の登場によって、ルールの変更や新設も必要になります。また、法則・ノウハウ・作法といった、ルールとはいかないまでも、何かを達成するために必要な知識なり手法があるのも事実で、そのような事例も取り上げることで、現状をしっかりと把握し、そこから演繹・応用し（守破離）、日常生活に役立つような講座にできればと思います。

適用する組織とは、「家族・地域・自治体・国家・地球・宇宙・生物・個人事業・商店（街）・企業・団体」等で、ルールとは、「定義・定理・法則・法律・ノウハウ・決まりごと・習慣・慣習・宗教・経典・教典・原理・原則・スポーツのルール」等を想定しています。

2017 年度までは主として 8 日間 16 講師の構成であったが、受講料は据え置きのまま、2018 年度は 5 日間 10 講師としたにもかかわらず、定員 350 名のところ 500 名を超える応募があり、例年であれば塾内各キャンパスに宣伝用ポスターを掲示するが、掲示することなく早々に募集を締め切ることとなった。

実施日・講演タイトル・演者は以下の通りである。

9 月 29 日

3 時限 「米国で医薬品・医療機器開発に挑む価値とベンチャー企業の役割」
窪田 良（医学部客員教授、窪田製薬ホールディングス会長、社長兼 CEO）

4 時限 「宝塚におけるルールと作法」
松永美緒（元宝塚歌劇団 月組、バレエ講師）

10 月 13 日

3 時限 「『美』とは何か」
横山千晶（法学部教授）

4 時限 「宇宙放射線とメディアリテラシー—『百聞は一見にしかず』の先にあるもの」
寺沢和洋（医学部助教、宇宙航空研究開発機構・客員研究員）

10 月 27 日

3 時限 「人生 100 年時代の生き方・死に方」
養老孟司（東京大学名誉教授）

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座

【全 5 回】

ルールと作法

2018年
9月29日(土)
11月17日(土)

人間界には様々なルールや決まり事があり、それらに従って日常生活を送っています。またそれらには必ず適用範囲があり、どのような事例・組織に適用するか、されるかを把握しておく必要がありますが、明確でない場合もしばしばで、ルールを知らないがために損をしていることも多いのではと推測します。時として、新しい概念の登場によって、ルールの変更や新設も必要になります。また、法則・ノウハウ・作法といった、ルールとはいかないまでも、何かを達成するために必要な知識なり手法があるのも事実で、そのような事例も取り上げることで、現状をしっかりと把握し、そこから演繹・応用し（守破離）、日常生活に役立つような講座にできればと思います。適用する組織とは、「家族・地域・自治体・国家・地球・宇宙・生物・個人事業・商店（街）・企業・団体」等で、ルールとは、「定義・定理・法則・法律・ノウハウ・決まりごと・習慣・慣習・宗教・経典・教典・原理・原則・スポーツのルール」等を想定しています。

講座内容 ① 3時限目 (13:00~14:30) ② 4時限目 (14:45~16:15)

9/29 (土)	米国で医薬品・医療機器開発に挑む価値とベンチャー企業の役割	窪田 良 医学部客員教授、窪田製薬ホールディングス会長、社長兼 CEO
	宝塚におけるルールと作法	松永美緒 元宝塚歌劇団 月組、バレエ講師
10/13 (土)	『美』とは何か	横山千晶 法学部教授
	宇宙放射線とメディアリテラシー—『百聞は一見にしかず』の先にあるもの	寺沢和洋 医学部助教、宇宙航空研究開発機構・客員研究員
10/27 (土)	人生100年時代の生き方・死に方	養老孟司 東京大学名誉教授
	中国宗教における死者の救済	酒井規史 慶應義塾大学客員教授
11/10 (土)	SPOTS選手への知識運動スキル—ボールはどのように見えるのか?	加藤貴昭 慶應義塾大学国際体育学部教授
	江戸文学のルール	津田貴子 慶應義塾大学文学部教授
11/17 (土)	幸せになるためのルールと作法	前野隆司 慶應義塾大学理工学部システムデザイン・デザイン学部教授
	日本におけるルールと作法	嵐沢文貴 慶應義塾大学文学部教授

※内容を要する事例により、講座内容・講師名・日程の変更、あるいは講師自体が休職となる場合があります。休職の場合は可能な限り連絡をとり変更ですが、開催できない場合もあります。あらかじめご了承くださいませ。変更については「広報研究センター」ホームページにてお知らせいたします。

※付録・付録、受講者には事前に受講料の領収書などによる本講座の休職、当日の午前 10 時 30 分迄に決致します。休職料については下記「募集要項」センターホームページにてご確認ください。

募集要項 (裏面にもご覧ください)

募集対象 社会人ほか
募集定員 350名 ※先着順受付。定員に達し次第、締切となります。

会場 慶應義塾大学日吉キャンパス内

受付期間 2018年7月26日~9月21日(必着)

定 額 6,000円(全5回)

申込方法 裏面を参照の上、①広報研究センターホームページ、②Eメール、③郵送、④お申し込みのいずれかの方法で申し込みください。
※組単位での申し込みも可能です。

申込受付 申し込み受付時に、受講料に関するご案内を送付致します。受講料の納入も、その案内に従って行ってください。発行していただきません。

特 典 期間中、自治体等の協賛が可能な場合があります。(貸し出し不可)。全5回中、3回以上出席の方に贈呈されます。受講料が返還される受講者センター贈呈品(書籍)1冊を授与致します。

●受講料の方々にわかる個人情報の取扱い
●慶應義塾大学広報研究センター主催「日吉キャンパス公開講座」受講にかかわる個人情報は、「日吉キャンパス公開講座」を主催するセンターからの取り扱いは利用し、そのプライバシーに配慮し、保護管理をいたし、第三者への提供や提供目的の範囲を超えて提供することはありません。個人情報は、ご本人の同意なしに第三者に提供することはありません。

慶應義塾大学教育研究センター
日吉キャンパス公開講座事務局 (慶應義塾大学出版会内)
〒208-8565 東京都港区三田3-19-30 E-mail: h-exr2018@dm.bunkyo.ac.jp
Tel: 03-3463-6788 Fax: 03-3463-7024

【お問い合わせ】
教育研究センター

2018年度

35

活動報告

4 時限 「中国宗教における死者の救済」
酒井規史（商学部専任講師）

11 月 10 日

3 時限 「スポーツ選手の知覚運動スキル
—ボールは止まって見えるのか？」
加藤貴昭（環境情報学部准教授）

4 時限 「江戸文学のルール
—出版統制と自主規制の商業文芸」
津田眞弓（経済学部教授）

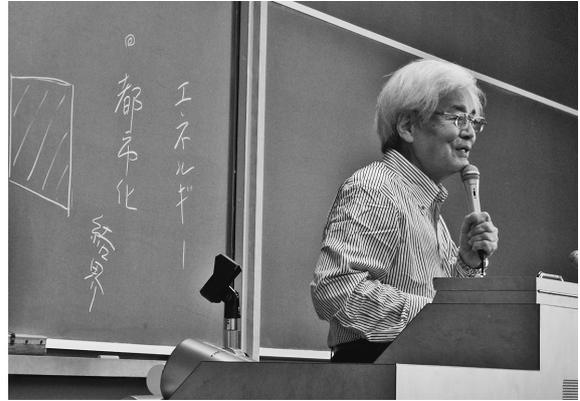
11 月 17 日

3 時限 「幸せになるためのルールと作法」
前野隆司（大学院システムデザイン・マネ
ジメント研究科教授）

4 時限 「日本軍におけるルールと作法
—捕虜問題を中心に」
黒沢文貴（東京女子大学現代教養学部国際
社会学科国際関係専攻教授）

塾外4名（窪田良先生、松永美緒先生、養老孟司先生、黒沢文貴先生）、塾内6名の陣容で、製菓・ベンチャー・宝塚・美術・宇宙・メディア・意識・生死・宗教・野球・文学・歴史・幸福・軍隊等の各分野にまつわるルールと作法についての講演がなされた。例年、「受講者の皆様が熱心にお聴き下さる」と演者の先生方から異口同音におっしゃっていただくことも多く、受講者アンケートからも「毎年楽しみ」「脳みそへの栄養になりました」との感想や貴重な意見も多くいただき、結果的に90%以上の受講者から「満足」との回答を得た。今後も、統一テーマを軸として、特定の分野に偏ることなく、日常的で身近な話題から最先端の研究開発の分野をできる限り網羅し、文理両分野の教員が多数在籍する日吉キャンパスの特徴を活かした講座を展開できればと考えている。

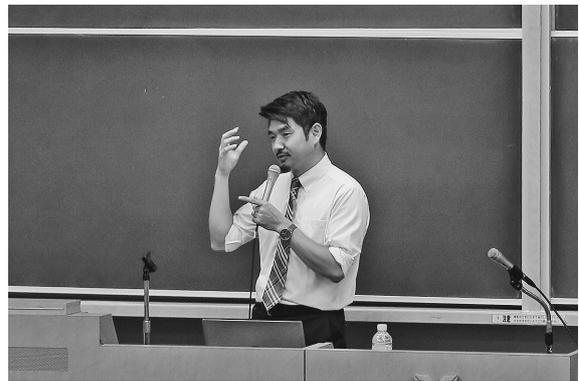
（寺沢和洋）



養老孟司氏



酒井規史氏



加藤貴昭氏



前野隆司氏

3 地域連携拠点「カドベヤ」

2011年4月に教養研究センターの地域連携拠点として「カドベヤ」が開所されてから、2018年の4月で満8年目に入った。そして2018年度は、教養研究センターの地域連携活動としてはカドベヤ最後の年となった。構想段階から数えれば、まさに9年目を迎えたカドベヤだが、この9年間で地域での存在は、それなりに認めていただけるようになり、この場所を必要とする人々の居場所として機能できるようになった。これは一にも二にも、参加者、運営組織、そして協力アーティストたちが、時間をかけて培ってきた信頼関係によるところが大きい。同時にその信頼関係を今まで支え続けてくれたのが教養研究センターということになる。

しかし、大学の、そして教養教育の中での「カドベヤ」の意義、そしてその果たしてきた役割となると、話はまた別となり、様々な問題が見えてきた9年間でもあった。その問題への回答が見つからなかったからこそ、そして、期待された成果が上げられなかったからこそ、本年度が教養研究センターでの最終年となったことは謙虚に受け取らなければならない。まずは授業とのタイアップの問題がある。開所当時から、地元のNPO法人「さなぎ達」との協力でフィールドワーク型の社会連携授業を開講してきたものの、残念ながら、「さなぎ達」が2017年4月末に改組となり、授業が開講できなくなってしまった。寿地区というある意味隔離された生活保護の町をフィールドにすることは、常に細心の注意を必要とする。それは学生たちを守るだけでなく、町の人々（その多くが高齢の生活保護受給者で、障がいを抱えている住民が多い）を精神的にも肉体的にも若い学生たちの過失から守る、ということをも含む。学生が心身に障がいのある高齢者と共に活動するためのノウハウは専門家のアドバイスが常に必要である。実践家のパートナーを失った時に、大学教育の脆弱さが露呈された形になった。理論や机上の学問だけでは、町と生身の人間との付き合いは学べない。同時に失敗は次の成長を促すとはいえ、時として大きな問題に発展することすらある。

また、かかわる側の学生との信頼関係も重要な課題となった。カドベヤには今まで日吉の学生以外にも三田の社会学専攻のゼミの学生や芸術系の他大学の学生たちも訪れてくれた。それぞれの学生たちがそれぞれの目的のもとにこの町と居場所を訪問してきた。居場所は常に開かれた場所であるが、同時に



町の一部でもある。学生たちの訪問を受けたり、カドベヤで学生主体のイベントを行うときは、なるべく学生たちと前もってやり取りを行い、臨機応変に対応できるようにした。それでも情報の行き違いや、大学以外の運営者への負担など、いくつかの問題点が明らかになった。学生たちの町との付き合いは、ほぼ一過性のものであり、その後訪れることのない学生とそれらの問題点をしっかりと共有できなかった点も、カドベヤが教育的な意義を十全に果たせなかったことの証左である。

とはいえ、カドベヤが教育や教養研究に果たした意義は決して皆無であったわけではない。毎年、授業に関係なく自ら興味をもって何度も足を運んでくれる学生たちがいる。今後もカドベヤはそのような学生たちを積極的に受け入れていくつもりである。また、活動を通して見えてきた問題点を踏まえて2018年に「創造力とコミュニティ」研究会も開設された。この研究会では、カドベヤのような居場所を含めて、市民が作るコミュニティの役割について今後研究を進めていく。これからは実践を通して見えてきたことを、理論化し、それをまた実践へと還元していく道筋を、カドベヤの運営委員会ともども模索していく予定である。今後その連環の中で大学や大学教育に携わる者のコミュニティの中での役割も見えてくると期待している。結局は大学人も一人の市民である。その力を専門にかかわらず、コミュニティにどう還元していくのかは、大学人のアイデンティティにもかかわってくるのだろう。

(横山千晶)

4「創造力とコミュニティ」 研究会

2016年10月、日本橋にて2020年の東京オリンピックに向けての「文化オリンピック」のキックオフセレモニーが行われた。2012年のロンドンオリンピックが国を挙げて推奨したCultural Olympiadをモデルとする「文化オリンピック」宣言では、「あらゆる人々が参加できるプログラムを全都道府県で実施し、地域を活性化する」というコミュニティの再生を「多くの若者に文化芸術への参加を促進し、創造性を育成する」とことと連携させて推し進めることが掲げられている。こうして2020年に控えるスポーツの祭典を、「多くの人が創造性を発揮する文化の祭典」としても位置付けることで、すでに様々な文化イベントが開催されている。

慶應義塾大学の日吉キャンパスが位置する横浜市でも「創造都市 (Creative City)」として、住民たちの創造性を人的資源として、町の活性化を目指す試みが展開されており、2020年のオリンピックに向けて、その創造性を発揮する構想が実現へと向かっている。横浜市はイギリスチームのホストシティとなり、慶應義塾大学日吉キャンパスもその一端を担うことになった。同時に2020年は横浜トリエンナーレの開催年でもあり、文化的なイベントがこれから次々と企画されていくことだろう。そのような動きの中で慶應義塾大学をはじめ、大学はどのように自らの位置と役割を確認し、打ち出していくのだろうか。そして教員や学生はどのようなスタンスで、自発的 (ボランタリー) にかかわっていけばよいのだろうか。

むしろこの「創造性」と「コミュニティ」の密接な関係は、2020年に向けておもむろに取り上げられたわけではない。21世紀は「創造性」と「コミュニティの活性化」の強力な連携が期待される世紀と言っても過言ではないのである。しかしながら、「創造性」とは何だろうか。また「コミュニティ」とはいったいどのようなものをいうのだろうか。

イギリスの社会批評家、レイモンド・ウィリアムズ (1921~1988) によれば、creativeという言葉が神の領分を離れ人間の行為に使われるようになったのは、思想や芸術と強く結びつけられるようになった19世紀のことであり、ひいてはその能力を指す「創造力 (creativity)」という言葉が生まれたのは、たかだか20世紀になってからのことである。そし

てウィリアムズは、この用語の乱用の甚だしさをも指摘した。communityという言葉も、多様な人間の直接的な関係やそれを促す組織体が、歴史の中で複雑に絡まって形成されていった言葉である。そして「社会」や「国家」という概念とコミュニティの概念が明らかに異なるのは、後者が肯定的なイメージと共に使われてきたことだろうが、ITによるヴァーチャルなコミュニティをも内包するようになった現在、この言葉が孕むイメージも大きく変化しつつある。

おそらくこれからの教養に必要なことは、ある意味で濫用され、さまざまにイメージ化されてきた概念をもう一度見直すことで、より実感できる「創造的」な「コミュニティ」の在り方を模索することであろう。

同時に大学もまた、「コミュニティ」であり、町というさらに大きなコミュニティに内包されている。大学はこの大きなコミュニティに直接的に働きかける真に創造的なコミュニティとなるべきであり、そこでの実践と発見が広く外に展開されたときに、その新たな創造力が社会の中で花開くはず、という考えに基づき、2018年、創造性とコミュニティの関係を歴史的、文化的、思想的に読み解き、未来へとつなげる研究会「創造力とコミュニティ」が立ち上がった。

2018年度は、発起人の横山千晶によるキックオフミーティング「汎濫する Creative」を5月に開催したのを皮切りに、7月に経済学部教授羽田功氏による第1回研究会「教養の神義論」を経て、第2回は2019年1月に教養研究センターの社会連携事業、居場所「カドベヤ」のそれまでの活動を振り返る『「カドベヤ」の10年を振り返る』、2018年度最終の研究会として、2019年2月に第3回「アートとコミュニティ、そして『居場所』の未来を考える」が開催された。出席者は大学教職員、アーティスト、居場所「カドベヤ」への参加者、アートNPOで活動する人々など、多岐にわたった。今後この研究会を続けることで、横浜市や慶應義塾大学での活動を見据えつつ、オリンピックが終わった後も、「文化オリンピック」の精神が、どのように社会や教育の現場で批判的に検証され、継承され、培われていくのかを見守っていく予定である。

(横山千晶)

5 羽田功教授最終講義 「異端の教養学」

2019年2月1日、日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースにおいて、羽田功教授最終講義「異端の教養学」が教養研究センター主催として行われた。雪の予想であったが、幸いにも積もらず、出席者名簿に署名しただけでも86名の参加者を得て、開催された。発起人は、不破有理(前所長)、横山千晶(元所長)、小菅隼人(現所長)、片山杜秀(副所長)、高橋宣也(副所長)、荒金直人(副所長)である。また、出席者には、横浜商科大学小林学長および清水理事長、また経済学部関係者、ボクシング部関係者、日吉地区教員、ドイツ語教員、卒業生ほか、羽田教授の交際の広さを示す多彩な顔触れが見られた。講義の様子は収録されて教養研究センターのホームページにて公開されている。講義終了後、ボクシング部、教養研究センターなどから花束の贈呈があった。

教養研究センターとして「最終講義」を主催した理由として、(1)教養研究・教養教育のために尽力された所員の講義を聴く最後の機会を設けたいという希望が多くあったこと、(2)理工学部など最終講義を実施している学部はあるが、多くは卒業生による個別のイベントになっており、実態として日吉所属教員については殆ど行われていないこと、が挙げられる。この二点を踏まえて、企画を提案したところ、積極的な賛同を得たが、教養研究センターとしては最初の開催となるので、いくつかの方針を立てた。

- (1) この最終講義は慣例化せず、開催の是非についてはその都度コーディネート・オフィス会議で議論して決定する。
- (2) 今回については所長が発起人代表を務めるが、代表は所長副所長などに限らず、次回以降はその都度コーディネート・オフィス会議で議論して決定する。
- (3) 有志が個人的に最終講義後の懇親パーティを開催することを妨げないが、教養研究センターとしての懇親パーティは行わずその為の支出もしない。また、花束の為の支出もしない。
- (4) 開催案内は学内とHPに掲載し、参加者は慶應義塾教職員・学生に限らず、広く一般に開くことにする。
- (5) 今回の講義は映像で記録され教養研究センターのホームページで公開されるが、前例化せず、その都度コーディネート・オフィス会議で議論して決定する。

羽田功教授は、1991年の大学設置基準の大綱化という大波の中で、日吉の教養教育についての議論をまとめ上げ、2002年の教養研究センター開所にあたっては、初代所長として私たちを導いてくれた。今回、多くの参加者を得てこの最終講義を開催できたことは、それ自体、羽田教授がいかに日吉の教育に尽力されたかを示すものであり、教養研究センターの教養研究にとっても貴重な蓄積になったと考えている。

(小菅隼人)

羽田功教授最終講義

異端の教養学

羽田功教授は、1981年経済学部助手に就任されて以来、経済学部日吉主任、日吉メディアセンター所長、慶應義塾高等学校校長、体育会ボクシング部部長を歴任され、専門とするユタキ研究に加えて、特に日吉キャンパスの研究・教育の発展に尽力されました。

とりわけ、1991年の大学設置基準の大綱化という大波の中で、日吉の教養教育についての議論をまとめ上げ、2002年の教養研究センター開所にあたっては、初代所長として私たちを導いてくださいました。2019年3月の定年退職を前にして、教養研究センターは、主催事業として「羽田功教授最終講義」を実施いたします。羽田教授のお話に興味のある方なら、教職員、学生、一般を問わず、どなたも聴講できます。是非、ご参加ください。

教養研究センター所長 小菅隼人

羽田功教授最終講義発起人
不破有理、横山千晶、小菅隼人、片山杜秀、高橋宣也、荒金直人



2019年2月1日(金)
14:45 ~ 16:15
日吉キャンパス
来往舎1階シンポジウムスペース

主催・お問合せ
慶應義塾大学教養研究センター
toiwase-lib@adst.keio.ac.jp

2019年
2月1日
•Fri•



1 慶應義塾大学教養研究センター規程

平成14年7月2日制定

改正 平成17年6月3日 平成18年5月9日
平成20年5月1日 平成20年11月4日
平成21年12月15日 平成23年3月29日
平成26年12月5日

(設置)

第1条 慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学教養研究センター(Keio Research Center for the Liberal Arts。以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

(組織)

第4条 ① センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
 - 2 副所長 若干名
 - 3 所員 若干名
 - 4 研究員 若干名
 - 5 事務長
 - 6 職員 若干名
- ② 所長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- ③ 副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。
- ④ 所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。
- ⑤ 研究員は、特任教員、研究員(有期)または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

⑥ 国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

⑦ 事務長は、センターの事務を統括する。

⑧ 職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。(運営委員会)

第5条 ① センターに運営委員会を置く。

② 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉ITC所長
- 9 体育研究所長
- 10 外国語教育研究センター所長
- 11 自然科学研究教育センター所長
- 12 日吉キャンパス事務長
- 13 その他所長が必要と認めたる者

③ 委員の任期は、役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

④ 運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

⑤ 運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムに関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに関する事項
- 7 その他必要と認める事項

(コーディネート・オフィス)

第6条 ① センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために、運営委員会の下にコーディネート・オフィスを置く。

② コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。コーディネーターは、所長、副所長、事務長とともに、センターの事業を推進する。

③ コーディネート・オフィスは、必要に応じて委員会を置き、センターの事業活動の一部を付託す

ることができる。

(特別委員会)

第7条 運営委員会は、必要に応じて特別委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

(教職員の任免)

第8条 ① センターの教職員等の任免は、次の各号による。

1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。

2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。

3 特任教員および研究員(有期)については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

4 訪問研究者については、「訪問学者に対する職位規程(昭和51年8月27日制定)」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程(就)(昭和27年3月31日制定)」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員および義塾職員の中から、所長が推薦し、運営委員会が委嘱する。

② 所長、副所長およびコーディネーターの任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

③ 所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

④ 兼任研究員の任期は、次条に定める研究プログラムの研究期間とする。

(研究プログラム)

第9条 ① センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究

2 一般研究：センターが必要と認めた個人研究または共同研究

3 特定研究：センターが企画、立案した研究

② 研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

(契約)

第10条 ① 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

② 学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

(経理)

第11条 ① センターの経理は、「慶應義塾経理規程(昭和46年2月15日制定)」の定めるところによる。

② センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

③ 外部資金の取扱い等については、学術研究支援部の定めるところによる。

(規程の改廃)

第12条 この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決定する。

附 則

① この規程は、平成14年7月1日から施行する。

② この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

附 則(平成17年6月3日)

この規程は、平成17年6月3日から施行する。

附 則(平成18年5月9日)

この規程は、平成18年5月9日から施行し、平成18年5月1日から適用する。

附 則(平成20年5月1日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成20年11月4日)

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附 則(平成21年12月15日)

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則(平成23年3月29日)

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則(平成26年12月5日)

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

2 運営委員会委員

2018年4月1日～2019年3月31日在籍者
第9期（2017年10月1日～2019年9月30日）

教養研究センター担当常任理事

鈴木 直樹（2018年5月28日まで）
青山藤詞郎（2018年5月29日から）

教養研究センター所長

小菅 隼人

教養研究センター副所長

片山 杜秀
高橋 宣也
新島 進（2018年9月30日まで）
荒金 直人（2018年10月1日から）

教養研究センター事務長

大古殿憲治

文学部長 松浦 良充

経済学部長 池田 幸弘

法学部長 岩谷 十郎

商学部長 榊原 研互

医学部長 天谷 雅行

理工学部長 伊藤 公平

総合政策学部長

河添 健

環境情報学部長

濱田 庸子

看護医療学部長

小松 浩子

薬学部長 金澤 秀子

文学部日吉主任

坂本 光

経済学部日吉主任

柏崎千佳子

法学部日吉主任

奥田 暁代

商学部日吉主任

種村 和史

医学部日吉主任

井上 浩義

理工学部日吉主任

萩原 眞一

薬学部日吉主任

田村 悦臣

体育研究所所長

石手 靖

日吉メディアセンター所長

横山 千晶

日吉ITC所長

小林 宏充

外国語教育研究センター所長

七字 眞明

自然科学研究教育センター所長

金子 洋之

日吉研究室運営委員会委員長

不破 有理

日吉キャンパス事務長

蠣崎 元章

日吉学生部事務長

千葉 徹

日吉メディアセンター事務長

長島 敏樹

日吉キャンパス事務センター課長

川田 孝征

日吉行事企画委員会（HAPP）委員長

石井 明

日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長

寺沢 和洋

3 組織構成員

2018年4月1日～2019年3月31日

所員：193名（2019年3月31日現在）

所長：小菅隼人（理）

副所長：片山杜秀（法）

高橋宣也（文）

新島進（経・2018年9月30日まで）

荒金直人（理・2018年10月1日から）

コーディネーター：

萩原眞一（理）、武藤浩史（法）、種村和史（商）、

佐藤望（商）、赤江雄一（文）、羽田功（経）、

長田進（経）、高山緑（理）、鈴木晃仁（経）、

不破有理（経）、徳永聡子（文）、横山千晶（法）、

前野隆司（SDM研究科）、高田眞吾（理）、石井明（経）、

寺沢和洋（医）、

荒金直人（理・2018年9月30日まで）、

西尾宇広（商・2018年10月1日から）、

蠣崎元章（キャンパス事務長）、

大古殿憲治（教セ事務長）

広報担当：高橋宣也（文）

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：石井明（経）

委員：高橋宣也（文）、大出敦（法）佐藤望（商）、

竹内美佳子（商）、津田眞弓（経）、

小菅隼人（理）、小宮繁（理）、小林拓也（理）

石手靖（体研）、徳村光昭（保セ）、

蠣崎元章（キャンパス事務長）、川田孝征（運営サ）、

難波陽平（運営サ）、友田明文（学生部）、

五十嵐暁俊（学生部・2018年11月1日から）

長島敏樹（日吉メディアセ）、

長野裕恵（日吉メディアセ）、鈴木都美子（教養セ）

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

新島進（経・2018年9月30日まで）

荒金直人（理・2018年10月1日から）

「生命の教養学」企画委員

委員長：荒金直人（理・2018年9月30日まで）

西尾宇広（商・2018年10月1日から）

委員：伏見岳志（商）、高山緑（理）、

沼尾恵（理）、松原輝彦（理）、

西尾宇広（商・2018年9月30日まで）

下村裕（法・2018年9月30日まで）

坂内健一（理・2018年10月1日から）

龍角散寄附講座運営委員会（2018年9月30日まで）

委員長：小菅隼人（理）

委員：片山杜秀（法）、高橋宣也（文）

新島進（経）、佐藤望（商）

日吉キャンパス公開講座運営委員会

委員長：寺沢和洋（医）

委員：小菅隼人（理）、石井明（経）、

山下一夫（理）、高橋宣也（文）、

福澤利彦（商・2018年9月30日まで）、

前野隆司（SDM研究科・2018年9月30日まで）、

佐々木玲子（体研・2018年9月30日まで）、

島田美和（法・2018年9月30日まで）、

有川智己（経・2018年10月1日から）、

酒井規史（商・2018年10月1日から）、

神武直彦（SDM研究科・2018年10月1日から）

野口和行（体研・2018年10月1日から）

蠣崎元章（キャンパス事務長）

2018年度庄内セミナースタッフ

羽田功（経）、小菅隼人（理）、

片山杜秀（法）、鈴木亮子（経）、

森吉直子（商）、杉山有紀子（理）

庄内セミナー実行委員会

委員長：羽田功（経・2018年11月30日まで）

鈴木亮子（経・2018年12月1日から）

委員：小菅隼人（理）、森吉直子（商）、

片山杜秀（法・2018年11月30日まで）、

鈴木亮子（経・2018年11月30日まで）、

杉山有紀子（理・2018年11月30日まで）、

荒金直人（理・2018年12月1日から）、

斎藤慶典（文・2018年12月1日から）、

呉茂松（経・2018年12月1日から）、

鳥海奈都子（塾高・2018年12月1日から）

日吉学運営委員会

小菅隼人（理）、片山杜秀（法）、高橋宣也（文）、

不破有理（経）、新島進（経・2018年9月30日まで）、

荒金直人（理・2018年10月1日から）

日吉学企画委員会

委員長：不破有理(経)

委員：小菅隼人(理)、片山杜秀(法)、高橋宣也(文)、
安藤弘道(文)、福山欣司(経)、長田 進(経)、
長沖暁子(経)、大出 敦(法)、
神武直彦(SDM 研究科)、都倉武之(福澤研究セ)、
阿久沢武史(塾高)、太田 弘(普通部)

教養研究センター事務局

大古殿憲治(事務長)

鈴木都美子、池本晶子、傳 小史、大澤 綾、
加藤明音

4 2018年度の主な活動記録

Date	Events
4	<p>5日 教養研究センター設置科目全体ガイダンス 学会・ワークショップ等開催支援「Dr. John Curran 講演会」 設置科目クラス別ガイダンス 7日 HAPP企画「歌舞伎のみかた、楽しみ方 犬丸治氏講演会」 18日 読書会推進企画「晴読雨読」田辺 元 『懺悔道としての哲学』を読む 第6弾 20日 第1回所長・副所長会議 23～27日 HAPP企画「壺井明 連作祭壇画『無主物』の展示と講演会」 27日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第1回</p>
5	<p>9日 第1回情報の教養学「ネットのダークマターー止まらない海賊版でマンガ・アニメは減びるのか？」 16日 第2回情報の教養学「炎上とサイバースケード 集団極性化や社会の分断」 ニュースレター 32号刊行 15日、22日 HAPP企画「ライブラリーコンサート in 日吉ー図書館がコンサートホールになる2日間ー」 18日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第2回 21日 第3回情報の教養学「フェイクニュースと民主主義 いま私たちが為すべきこと」 23日 HAPP企画「〈物語の世界〉no.5 神になりたかった男ードストエフスキー『悪霊』の世界 亀山郁夫講演会」 25日 第2回所長・副所長会議 26日 HAPP企画「塾長と日吉の森を歩こう」 30日 第二十二弾「研究の現場から」杉山有紀子</p>
6	<p>1日 第1回コーディネート・オフィス会議 2日 基盤研究「教養研究 芸術学関連学会連合第13回公開シンポジウム「芸術と教養」 5日 庄内セミナー募集説明会 6日 読書会推進企画「晴読雨読」田辺 元 『懺悔道としての哲学』を読む 第7弾 7日 第1回運営委員会 8日 HAPP企画「雪雄子舞踏公演」 15日 第3回所長・副所長会議 19日 HAPP企画「〈ことばの世界〉no.4 ドイツ語から見たドイツ人ー“individuell”と“selbstbewusst”から考える」 27日 学会・ワークショップ等開催支援「公開シンポジウム『北朝鮮とどう向き合うか』」 29日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第3回 30日 学会・ワークショップ等開催支援「アール・ジャクソン教授講演会“Passionate Agendas:Melodrama in Yoshimura Kozaburo” 情熱的なアジェンダ 吉村公三郎におけるメロドラマ」</p>
7	<p>4日 学会・ワークショップ等開催支援「目指せ！オリンピック・パラリンピック ボランティアスタッフ」 7日 HAPP企画「日吉音楽祭2018」 17日 学会・ワークショップ等開催支援「Storytelling for a Global Audience グローバル・オーディエンスに響くストーリーテリング」 24日 読書会推進企画「晴読雨読」田辺 元 『懺悔道としての哲学』を読む 第8弾 25日 日吉キャンパス公開講座 申込開始 27日 第4回所長・副所長会議 30日 極東証券寄附講座 生命の教養学13「飼う」刊行 31日 学習相談春学期反省会</p>
8	<p>3日 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第4回 3日 庄内セミナー参加者事前説明会 3日 第2回コーディネート・オフィス会議 29日～9/1 第9回庄内セミナー 31日 2017年度活動報告書刊行</p>
9	<p>5日 第2回運営委員会 7～9日 学会・ワークショップ等開催支援「マラルメ・シンポジウム」 9/22、29、10/6、13、20、27 実験授業「日吉学」全6回 過去から未来を紡ぐ日吉学「景観史とキャンパスデザイン編」 25日 第5回所長・副所長会議 25～28日 HAPP企画「記憶の足跡ーメキシコ麻薬戦争の真実 語り始める行方不明者家族ー」 29日～11/17 日吉キャンパス公開講座 「ルールと作法」〈全5回10コマ〉</p>

Date		Events	
10	6日	基盤研究「教養研究」シンポジウム no.3 「クラシック音楽を“教養”から考える」 学会・ワークショップ等開催支援「フランス映画『ヴァンサンへの手紙』を通して考える手話と異文化共生、そしてろう教育」 第二十三弾「研究の現場から」加藤有佳織 読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第5回 HAPP企画「薩摩琵琶から見る明治維新150年～琵琶歌「城山」に至る物語～」 第6回所長・副所長会議 読書会推進企画「晴読雨読」 「『論語』は日本でどう読まれてきたかー荻生徂徠を中心としつつ、伊藤仁斎から安富歩までの『論語』理解を知る」第1回 学会・ワークショップ等開催支援「2018年度 京都ユダヤ思想学会関東大会」 HAPP企画「Keio Refugee Week 2018「難民」を知るための2週間」 第5回情報の教養学「<弱いロボット>的思考のすすめ 他力本願なロボットがひらく弱いという希望、できないという可能性」	
	7日		
	10日		
	12日		
	12日		
	23日		
24日			
11	27日	学会・ワークショップ等開催支援「2018年度 京都ユダヤ思想学会関東大会」 HAPP企画「Keio Refugee Week 2018「難民」を知るための2週間」 第5回情報の教養学「<弱いロボット>的思考のすすめ 他力本願なロボットがひらく弱いという希望、できないという可能性」	
	29日～11/9		
	31日		
	7日		第6回情報の教養学「フォトニクスポリマーが拓く未来情報化社会 材料の機能がシステムを変える」 読書会推進企画「晴読雨読」 「『論語』は日本でどう読まれてきたかー荻生徂徠を中心としつつ、伊藤仁斎から安富歩までの『論語』理解を知る」第2回 第3回コーディネート・オフィス会議 第7回所長・副所長会議 第3回運営委員会 学会・ワークショップ等開催支援「JASPM30 第30回 日本ポピュラー音楽学会年次大会」 学会・ワークショップ等開催支援「鳥たちのフランス文学」 ニューズレター 33号刊行
	13日		
	14日		
20日			
21日			
24、25日			
25日			
30日			
12	7日	読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第6回 学会・ワークショップ等開催支援「国際アーサー王学会日本支部第32回年次大会」 第二十四弾「研究の現場から」糸田文 読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第1回	
	8日		
	12日		
	26日		
1	11日	読書会推進企画「晴読雨読」ハンナ・アレント『人間の条件』を読む 第7回 基盤研究「教養研究」講演会 no.3 「大地の芸術学—庭園と建築を歩む」 慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・オーケストラ演奏会 慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー・オーケストラ演奏会 学会・ワークショップ等開催支援「『いきる力』を引き出す！スペインのプログラム」 第8回所長・副所長会議 読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第2回	
	16日		
	16日		
	20日		
	25～27日		
	25日		
31日			
2	1日	羽田功教授最終講義「異端の教養学」 極東証券寄附講座 アカデミック・スキルズ プレゼンテーションコンペティション 第4回コーディネート・オフィス会議	
	6日		
	26日		
3	6日	第4回運営委員会 読書会推進企画「晴読雨読」丸山眞男『日本政治思想史研究』を読む 第3回 2019年度学習相談キックオフミーティング 第9回所長・副所長会議 教養研究センター選書19『修身論』の「天」-阿部泰蔵の翻訳に隠された真相』（アルベルト・ミヤン マルティン）刊行 2018年度アカデミック・スキルズ学生論文集刊行	
	14日		
	27日		
	29日		
	31日		
	31日		

慶應義塾大学教養研究センター
2018年度 活動報告書

2019年8月31日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 小菅隼人

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-566-1151

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

印刷・製本 サンパートナーズ(株)

©2018 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISBN978-4-903248-57-8

Keio University



慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts